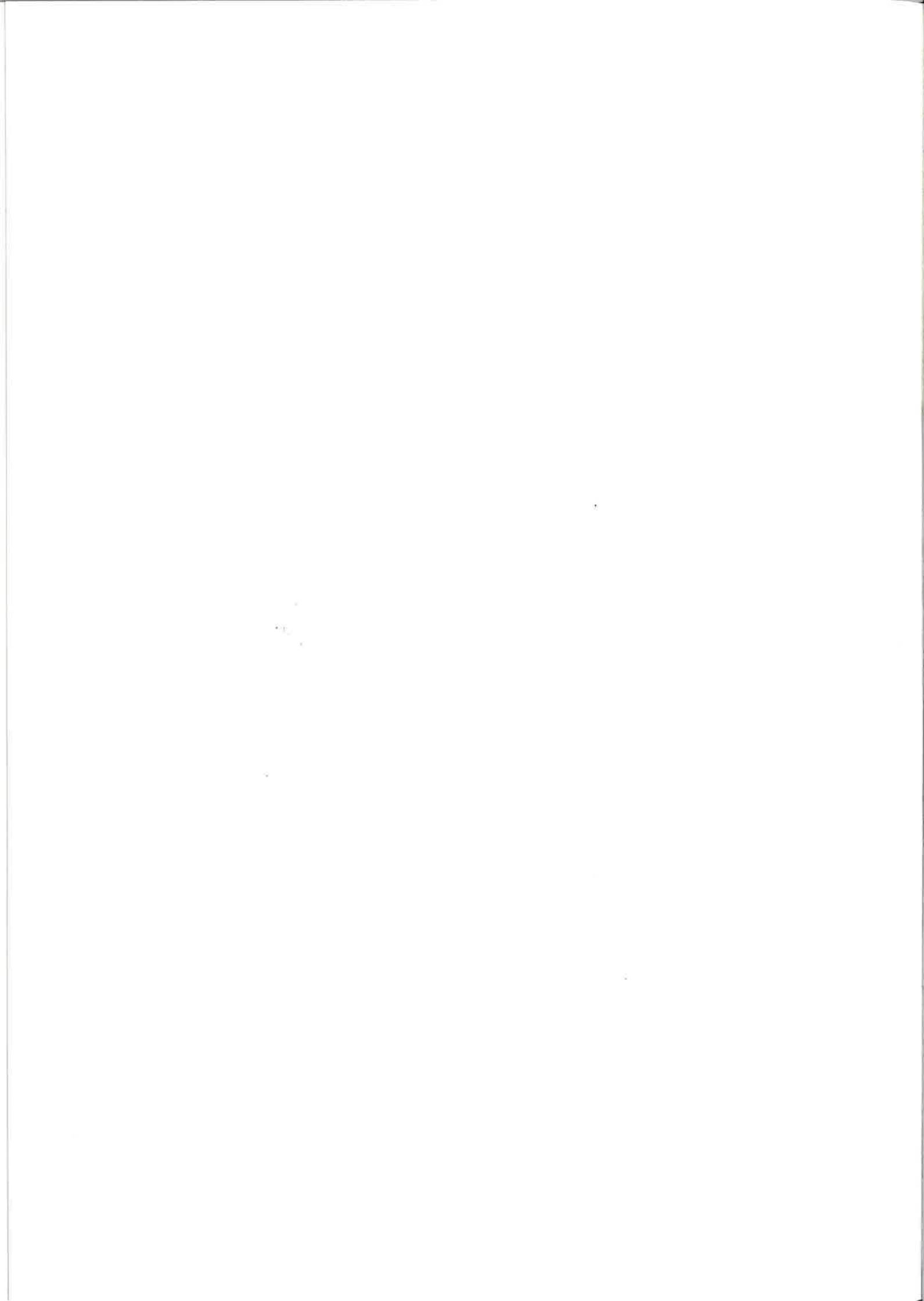


愛・地球博

～理念の継承と展開～

愛・地球博 開幕10周年記念出版

一般財団法人地球産業文化研究所 (GISPRI)



愛・地球博

～理念の継承と展開～



愛・地球博 開幕10周年記念出版
一般財団法人地球産業文化研究所 (GISPRI)

序文	3
I 愛・地球博から10年	5
1. 21世紀初の国際博覧会	6
2. テーマを徹底的に追求	7
3. 最先端技術によるブレイクスルー	8
4. 新たな社会行動やシステムの採用	9
5. 世界の多様な文化・価値観のふれあい	9
6. 第3のエンジン「市民」	10
7. モリゾー・キッコロの活躍	10
II 地球産業文化研究所による理念継承事業	11
1. 国内における事業	12
(1) 周年事業	12
(2) 助成事業	19
(3) モリコロライセンスセンター	20
2. 国際博覧会への参画	21
(1) 2008年サラゴサ国際博覧会	21
(2) 2010年上海国際博覧会	24
(3) 2012年麗水国際博覧会	27
(4) 2015年ミラノ国際博覧会	29
(5) アスタナ博以降の国際博について	32
3. BIEとの連携	33
4. いつまでも続く愛知の情熱	34
III 持続可能な社会づくりのための技術	35
1. 新エネルギーは本格的な普及段階へ	36
2. ドライミストのその後	38
3. 画期的なバイオラングとITS	39
4. 世界に先行するバイオプラスチック利用	40
IV 新たな社会を動かすエンジン	41
1. EXPOエコマネー普及に知恵	42
2. ごみ削減で官民取り組み	43
3. 着々と再整備される会場跡地	44
4. 愛・地球博を契機とした名古屋城本丸御殿復元工事	46
5. モリコロは引っ張りだこ	48
6. 広がるボランティアと市民参加	49
7. フレンドシップで続く草の根交流	50
8. 進む国際化と「もてなし」意識	51
9. COP10・ESDユネスコ世界会議の開催	52
インタビュー集	53
Interview 1 中村 利雄	54
Interview 2 原田 鎮郎	56
Interview 3 福井 昌平	57
Interview 4 牧村 真史	58
資料編	59
2005年日本国際博覧会協会による理念継承発展事業一覧	60
地球産業文化研究所助成事業一覧	62

序 文

「自然の叡智」という深遠なるテーマを掲げて2005年3月25日に開幕した愛・地球博は、2015年3月で開幕から10年目を迎えました。

一般財団法人地球産業文化研究所は、2007年4月から、2005年日本国際博覧会協会（以下「旧協会」と言います）から託された愛・地球博の理念を継承発展させる事業を積極的に展開して参りました。この事業は、BIE（博覧会国際事務局）からの国際博覧会運動の一環として愛・地球博が追求した基本理念と達成した成果を機会ある毎に国際場裡において発信すべきとの要請にも沿うものでもあります。

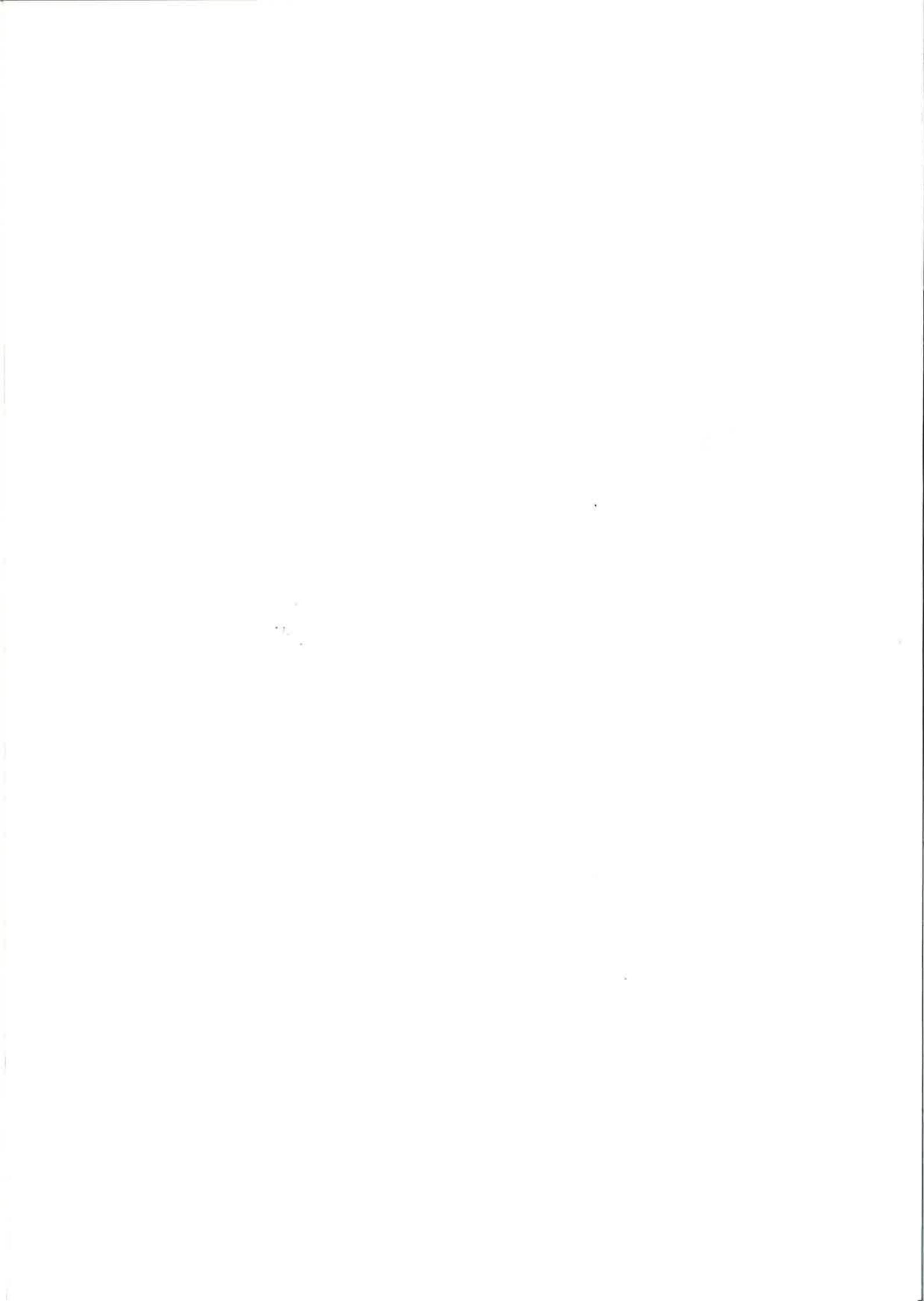
この事業は、記念事業、成果発信事業、成果実用化事業の3事業で構成されます。これらの事業の中で、規模・内容ともに特に大きな地位を占めるものとしては、2005年以降の国際博覧会における愛・地球博の理念を発信する事業（成果発信事業）があげられます。当財団は、2008年のスペイン・サラゴサ博、2010年の中国・上海博、2012年の韓国・麗水博と様々な事業を展開してまいりました。そして、2015年5月に開幕したイタリア・ミラノ博においても、様々な事業を展開いたしました。

また、ミラノ博に続く国際博覧会も、2017年にはカザフスタンのアスタナで、2020年にはUAEのドバイで開催されることが決まっております。今後開催される国際博覧会においても、「すべての国際博覧会は地球規模の課題の解決に貢献するものでなければならない」との1994年BIE決議の趣旨に沿って、主催国、参加国が積極的に取り組むことを期待するところです。そして、そのような取り組みに対して、愛・地球博の経験とその理念が貢献できれば幸いであると考えます。

本誌は、愛・地球博開幕10周年の節目を契機に、当財団が2007年4月からこれまで約9年の間に実施してきた愛・地球博理念継承発展事業を改めて振り返り、多くの方々に知っていただくことで、未来につなげていくことを目的として取りまとめました。

当財団は、愛・地球博のテーマである「自然の叡智」が目指した自然の摂理を尊重する持続可能な社会の実現に向けて今後も活動してまいります。

愛・地球博の開幕10年という節目を機に、愛・地球博の理念とその取り組みが未来につながっていくことを強く祈念します。





愛・地球博から10年

2,200万余りの人々に感銘を与え、さまざまな思い出を残した「愛・地球博」。「自然の叡智」というテーマはもとより、この高邁な理念をわかりやすく示し、実感できるようにしたことが世界的に評価された。まずは「愛・地球博」とはいかなる博覧会だったのかを振り返ってみる。



21世紀初の国際博覧会

150年余りの歴史を有する国際博覧会は、開催される時代の背景や潮流を反映し、会場や建築、展示、催事は世の中のトレンドをリードするとともに、開催地のみならず世界の人々にも大きなインパクトを与えてきた。しかし1990年代に入ると、技術の急速な進展にともない人、モノ、情報が地球規模で大移動する時代となり、半年間という限定された期間、特定の場所に人を集めるイベントは時代遅れとの声が高まり、国際博覧会の存在意義が厳しく問われてきていた。こうした時代背景のなか、21世紀初の国際博覧会として開催された愛・地球博は、国際博覧会の意義が地球規模の課題解決に向けての貢献にあると再確認しつつ、バーチャルな交流が進む時代だからこそ顔と顔が見える交流を行い、最先端の技術に実際に触れ、人々の意識を行動に変えていくきっかけとしていくべきだとの姿勢で取り組まれた。



インタープリターと森を散策



開会式



開会式にご出席された天皇后陛下と皇太子殿下



内外の賓客が訪れた日本広場



会場全景



会場内をつないだグローバルループ



2005年3月25日中日新聞掲載



テーマを徹底的に追求



中国館での催事



中国館外観



韓国館とナショナルデーでパレードする韓国の学生

開催準備段階から閉幕に至るまで、愛・地球博はテーマを徹底的に追求した博覧会であった。メインテーマ「自然の叡智」には、人間は自然の一部であることを認識し、自然が本来有している素晴らしい仕組みや生命の絶妙な営みを謙虚に学び、自然と人間の関係を見直し、自然と調和した新しい文明の構築を目指すという強いメッセージが込められた。

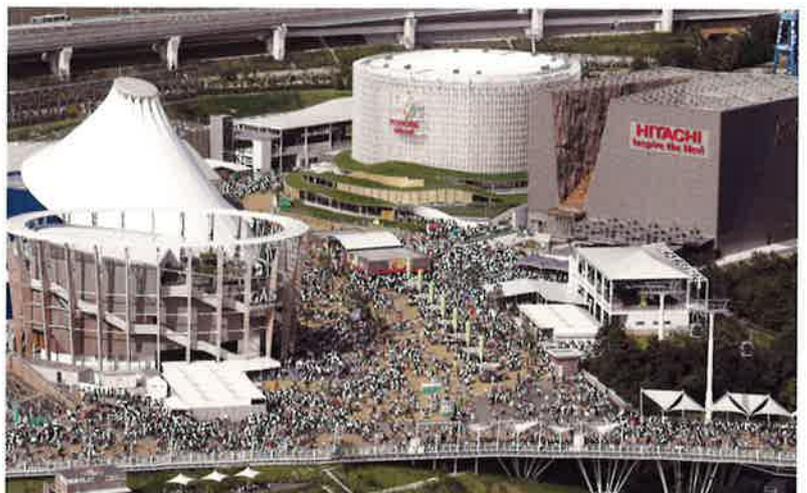
このテーマを会場全体、運営全体で具体化した。その姿勢は多くの参加国、国際機関、企業出展の賛同も得た。最先端技術によるブレイクスルー、新たな社会行動やシステムの採用、多様な文化・価値観の共有、NGOや市民の参加の大きく4つの分野と領域でさまざまな取り組みを行った。



グランドフィナーレ フェアウェルパーティー



夕暮れせまる会場



にぎわう企業パビリオンゾーン



最先端技術によるブレイクスルー

会場で紹介された先端技術は単なる実験でなく、実証レベルで数々の取り組みが行われた。世界最大規模の循環型新エネルギーシステムの実証実験は、会場建設時に伐採した木材や、会場で発生した生ごみ、ペットボトルなどを処理して燃料電池によって電力を生み出し、日本館などに実際に供給した。会場内の随所に太陽光などの自然エネルギーを活用した発電システムも設置し、複合型のエネルギーシステムとした。これらは会期後、移設されて地域の電力供給システムとして実稼動している。

先端技術によるもう一つの特徴的な取り組みとして、2,000万個以上の食器や場内のサイン、公式オリジナル商品や包装紙などにバイオプラスチックを単独の事業では過去に例のないほど大規模に活用したことがある。

愛・地球博の後、バイオプラスチックは携帯電話など身近な製品の素材として使われるようになった。また、入場券のICチップは物流業界で活用さ



新エネルギー実証プラント

れているし、会期中3人の命を救ったAED（自動体外式除細動器）は随所に配備されるようになった。さらにはドライミストが全国各地の公共施設や民間ビルに導入され、バイオラングを応用した緑化壁面が街角を彩るなど、愛・地球博を契機として社会に普及したモノや技術は多数ある。



ICチップが内蔵された入場券



AED（自動体外式除細動器）



愛・地球博から10年

新たな社会行動やシステムの採用

新しい社会システムへの挑戦として、愛・地球博では3R社会の実現に向け、国際博覧会史上類のない17種類のごみ分別を実践した。この体験は多くの来場者の記憶に深く残り、地域でのごみ分別や廃棄物削減意識の浸透に大きな効果を与えた。博覧会を契機に環境活動に参加し、新たに活動をは

じめる人々も多く、開催地をはじめとする多くの人々の環境への意識は変わってきた。環境行動を経済価値に変換し、行動を喚起する社会システムとして実践された「EXPOエコマネー」は会期中約60万人が利用し、閉幕後は主に豊田市に拠点を移し、地域の社会システムの一つとして活動を継続している。



ごみ分別の実践



EXPOエコマネーセンター



愛・地球博から10年

世界の多様な文化・価値観のふれあい

120を超える参加国、国際機関も愛・地球博のテーマ重視の姿勢に呼応し、地球共生時代に向けた各国の知恵や技を披露した。このことは多様な文化や価値を共有するきっかけとなった。会期中、



世界の国々の人々と交流し、異国の文化にふれあう

参加各国と地域の人々、スタッフ間の交流も活発に行われた。閉幕後、各国の展示品などの一部は地域で再活用された。開催地の人々にとって、愛・地球博での世界との出会いは思い出として心の中に継承されているだけでなく、そこで培った「もてなし」やノウハウを国際会議の開催に生かそうとするなど、国際化時代の大きな自信につながっている。



愛・地球博から10年

第3のエンジン「市民」

国際博覧会史上初の試みとなった本格的な市民参加の試みは、NGOなどを国や企業に続く第3の参加主体として位置づけ、延べ約10万人のボランティアを運営に生かすなど「見る博覧会から参加する博覧会へ」の転換を図った。参加した多くの

人々にとって、愛・地球博は自分たちがつくりあげた博覧会であるという誇りを持つことができ、閉幕後も開催地でのNPO、市民の活動は熱気をもって続いている。



地球市民村



会場を案内するボランティア



愛・地球博から10年

モリゾー・キッコロの活躍

最後に忘れてはいけないのが、2002年3月、より多くの人々に博覧会に親しんでもらうために生まれたキャラクター「モリゾー・キッコロ」(命名は同年6月)だ。開会前からアニメ化されてテレビ放映されるなど、子どもから大人に至るまで、過去の博覧

会にはないほどの絶大な人気を誇った。フィナーレとともに一度は森に帰ったモリゾー・キッコロだが、環境大使の称号とともに復活し、エコ活動を応援したり、環境問題を一緒に考えたりするなど、今もさまざまな場面で活躍している。



会場内では常に人垣ができたモリゾーとキッコロ



モリコロを扱った公式グッズは飛ぶように売れた



II

地球産業文化研究所 による理念継承事業

2006年6月、「2005年日本国際博覧会基本理念継承発展検討委員会」によりまとめられた報告書、「愛・地球博基本理念の継承と発展に向けて」において、基本理念の継承発展のために中核的役割を果たす推進母体として、財団法人地球産業文化研究所（GISPRI）が最適な承継法人として推薦された。

これを受けてGISPRIは2007年4月以降、愛・地球博を記憶に刻む「記念事業」、繰り返し伝える「成果発信事業」、遺産を具体的な形で実用化する「成果実用化事業」からなる基本理念継承発展事業を積極的に実施している。



国内における事業

(1) 周年事業

2周年記念事業

愛・地球博理念継承2周年記念事業「市民大交流フェスタ2007—つながり、広がれ、愛・地球博」が2007年8月18、19の両日、名古屋市のオアシス21で開かれた。2006年に財団法人2005年日本国際博覧会協会が実施した1周年記念事業(60ページ参照)に引き続き、博覧会のテーマの一つだった「市民参加」に焦点を当て、6事業に参加した40団体がさまざまな参加型ワークショップや対話型のブース展示を展開し、2日間で2万3,000人の来場者を迎えた。会場にはスペイン・サラゴサ万博に出展参加する日本政府館と市民パビリオンに関する情報発信ブースや中国・上海万博のブースも設けられた。メインステージではモリゾーとキッコロ、カラーキッコロも登場する華やかなオープニングセレモニーをはじめ、参加市民団体によるさまざまなパフォーマンス、「天才クイズ」万博バージョンも披露された。LOVEARTHでの公開生放送やクロー

ジングメッセージライブなども会場を盛り上げた。会場に隣接するNHK名古屋放送局のホールでは、博覧会に参加した国々の未公開記録映像を解説とともにハイビジョンで放映。博覧会を懐かしむ市民でホールは入りきれないほどだった。



NHK名古屋放送局での未公開映像上映会



オアシス21でのクロージングセレモニー

3周年記念事業

3周年記念事業は第1弾が「モリゾー・キッコロが帰ってきた! エコパーク2008」と題して2008年3月22、23の両日、名古屋市のアオアシス21、アスナル金山の広場で行われた。美しい地球をよみがえらせるために森から帰ってきたモリゾー・キッコロがナビゲーター役となり、子どもから大人まで、幅広い年代にエコロジーをもっと身近に考えることのできる「地球のエコ」イベントを環境と交流をテーマに展開。2会場で延べ13万5,000人が来場した。愛・地球博記念公園（モリコロパーク）で開催された愛知県主催の「春まつり」と連携。すべての会場で催されたスタンプラリーを達成した参加者にはEXPOエコマネーのポイントやGISPRI発行の環境読本「みらいへのかけ橋」が進呈された。エコメッセージを作成する「モリコロアート」やモリコロの写真撮影会には早朝から長蛇の列ができ、このイベントのために用意されたオリジナルピンバッジやエコ認定証の配布も好評だった。連日モリコロ出演のCMもオンエア。未来の地球のために博覧会で約束した「一人ひとりできることから地球を守ろう」とのメッセージで環境意識を啓発した。

第2弾の事業として「モリコロ&フルービー共演アニメ上映会」が2008年5月31日に名古屋市のレピアホールで行われた。スペイン・サラゴサ万



エコメッセージを作成した「モリコロアート」

博の直前PRと、愛知での感動や成果を多くの市民に再び思い返してもらうことを狙いとした。共演アニメは日本の自然を壊そうとした悪者を、モリゾー・キッコロとサラゴサ万博の公式マスコット「フルービー」やその仲間たちが一緒に退治していく内容で、きれいで豊かな水を守ることで環境を大切にすることが訴えられた。アニメは1話9分、ハイビジョン映像で6本分がスペインで制作され、日本語吹き替え版はGISPRIが制作。スペイン国内はもちろん、日本でもNHK教育テレビで放映された。当日は雨模様にもかかわらず約800人の来場者があり、モリゾー・キッコロとフルービーとのふれあいタイムでは子どもたちだけでなく大人たちも記念撮影をするなど人気を集めた。



オープニングセレモニー

国内における事業

4周年記念事業

4周年記念事業は第1弾として2009年3月12-18日にナゴヤドームで開かれた「第10回記念フラワードーム2009」のテーマ共催事業として繰り広げられた。テーマは「環境緑花—花と緑のあふれる暮らし」。GISPRIは愛・地球博を想起しながらあらためて生活空間のなかでの環境を考える場を提供した。開会式は高円宮妃殿下のご臨席のもと華やかに開催。会場中央に位置する「環境緑花ガーデン」には「愛・地球博モニュメント」が設置され、今回のテーマに沿って「環境に配慮した会場」「花と緑にあふれる会場」「緑を使った環境技術」「緑や花を愛でるプログラム」といったカテゴリー別に博覧会時の写真30点余りが展示された。色とりどりのチューリップや春色の花に囲まれたモニュメントにモリゾーとキッコロを見つけた来場者は、立ち止まって盛んに記念写真を撮っていた。



愛・地球博モニュメント



にぎわう環境緑花ガーデン

公募された「街で見つけた“環境緑花”」の最優秀作品は「財団法人地球産業文化研究所賞」として愛・地球博モニュメント前で表彰された。ステージイベントとしては週末にモリゾー・キッコロの「環境緑花」クイズ大会を展開。フラワードームにちなんで「花の精」であるピンクキッコロもスペシャル企画として一緒に登場した。招待券はEXPOエコマネーポイントと交換できるようにしたところ、多数の引き換えがあった。あわせて交通エコポンのリーダーも会場内に設置され、公共交通機関での来場や環境配慮行動が促された。会期中の来場者は約14万人に上り、大きな成果があった。

4周年にはこのほか、瀬戸会場跡地が「瀬戸万博記念公園(愛・パーク)」としてオープンしたのに合わせ、3月21、22の両日にGISPRI後援イベントなどが繰り広げられた。



モリゾー・キッコロの「環境緑花」クイズ大会

10周年記念事業

2015年（平成27年）は、2005年に開催した愛・地球博から10年という大きな節目に当たる。この節目の年に愛・地球博の理念を今後も確実に継承発展させ未来に繋げていくため、当財団は関係する自治体、団体等と密接な意見交換等を行い、経済産業省、愛知県、名古屋市、中経連及び名商

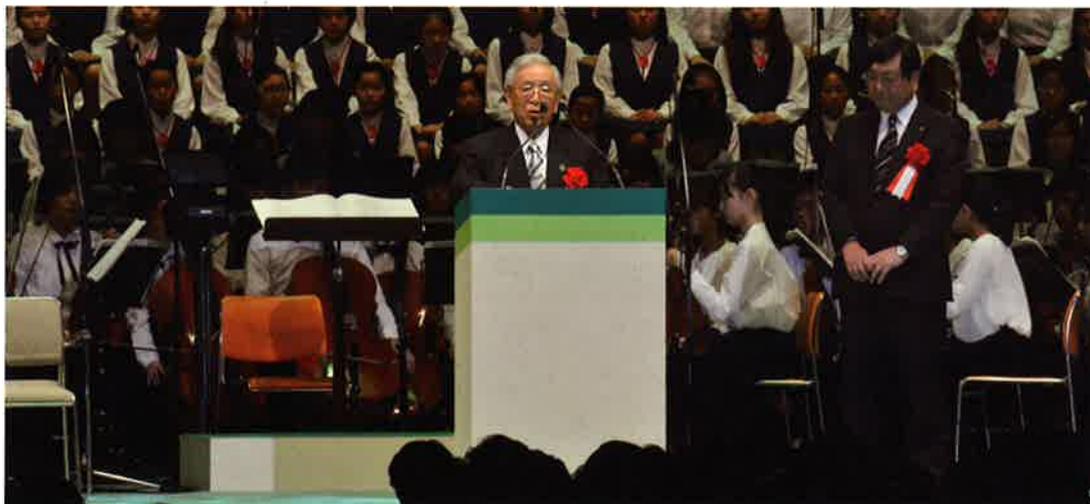
から後援をいただき、平成27年3月28日に愛知県体育館を主会場とする記念式典及び催事等を実施した。また、当財団と民間企業とのいろいろな協働事業も実施した。いずれの事業も好評をいただき、盛会の内に終了した。主な事業は以下のとおり。

①当財団主催事業

愛・地球博開幕10周年記念式典

2015年3月28日（土）13時から約1時間、愛知県体育館において、愛・地球博実施関係者約1,400名が参加した記念式典を開催した。本式典では、豊田章一郎元2005年日本国際博覧会協会会長、中村利雄元事務総長からご挨拶をいただき、来賓のロ

セルタレスBIE事務局長、大村愛知県知事、井内中部経済産業局長（宮沢経済産業大臣祝辞代読）からご祝辞をいただいた。その後、愛・地球博の理念継承を音楽・映像によって演出したテーマ催事を実施した。



元2005年日本国際博覧会協会豊田章一郎会長（ご挨拶）、中村利雄事務総長（右側）この後ご挨拶



国際博覧会事務局（BIE）ロセルタレス事務局長のご祝辞

国内における事業

メイン催事

同日16時30分から約1時間半、愛知県体育館において、上記記念式典参加者及び公募した一般の方々、約3,300名の参加を得て、メイン催事を開催した。本催事では、愛・地球博からミラノ博へ、

更に未来に向けて理念継承を体感できる音楽イベントを実施した。

また同日午後、体育館外の広場で記念パレードを2回実施した。



森山良子さん、夏川りみさん、書家・紫舟さん、和太鼓・打打打団天鼓、石井竜也さんと共にエンディング「Friends Love Believing～2015」の合唱



愛知県体育館外での記念パレード

愛・地球博市民おまつり広場事業

同日11時から17時の間、愛知県体育館外の東亀甲広場にて市民団体、NPO法人等による理念継承活動の展示やステージパフォーマンス等を実施した。



モリコロ・ダンスパフォーマンス事業

3月21日、22日、28日の3日間に亘り名古屋駅コンコースにて、モリコロ等によるダンスパフォーマンスやグリーティング、撮影会を実施した。



愛・地球市民フォーラムの開催

4月4日11時半から17時の間、愛・地球博記念公園内の地球市民交流センターにおいて市民団体、NPO法人等による愛・地球市民フォーラムを開催した。

第一部は、「愛・地球博からミラノ万博へ～伝えたい、活かしたい私たちの想いと経験～」をテーマ

にトークセッションを実施した。

第二部は、愛・地球博に携わった方々の経験談とその後の活かし方について発表した。

その他、愛・地球博ボランティアセンター、EXPOエコマネーセンター等の10年の歩みを振り返るパネル展等を実施した。

②当財団と民間企業との協働事業

CBCテレビ

CBCテレビにおいて、元2005年日本国際博覧会協会豊田章一郎会長及び同中村利雄事務総長の愛・地球博での苦労話や「自然の叡智」をどう継承していくべきか等のインタビューを中心とした

愛・地球博特別番組「愛・地球博10年後の花」の放映（3月21日17時から17時30分）や、CBCラジオでの万博公式番組「LOVEARTH」の復活放送等を実施した。

国内における事業

東海テレビ

3月29日10時から17時の間、久屋大通公園エンゼル広場においてファミリー向けのフェスティバル「地球の恵みフェスティバル」を開催した。その際、ステージにて2015年5月から開幕したミラノ博覧会も紹介した。



朝日新聞・名古屋テレビ・大広グループ

3月7日、愛・地球博記念公園においてモリコロ里山学校10周年メモリアルスペシャル事業の実施、

「メ〜テレ」テレビでの特別番組放映、朝日新聞朝刊でのモリコロ里山学校報道等を実施した。

アサツー ディ・ケイ

10周年を記念してモリゾー・キッコロの一層の活用を促進するぬいぐるみやお菓子等のモリコロライ

センス事業を特別に実施した。



③愛・地球博関係資料のデジタル化及び国立国会図書館への寄贈

開幕10周年を機に、2005年日本国際博覧会公式記録集、同公式記録写真集等の愛・地球博に関する文献・映像等資料のデジタル化及び同デジ

タル資料の国立国会図書館への寄贈に向けた事業に着手し、2016年3月末にデジタル化を終了し、4月に国立国会図書館へ寄贈した。

(2) 助成事業

GISPRIは、2007年度以来、愛・地球博の基本理念を継承発展させるにふさわしい非営利の社会貢献活動に対する支援を行う「愛・地球博理念継承発展助成事業」を行ってきた。本事業は、NPO法人などの非営利を目的とする団体が行う全国規模または国際的規模の活動を「愛・地球博記念事業を発展促進させる事業部門」、「国際交流を発展促進させる事業部門」、「『自然の叡智』を深化させる部門」の категорияに分け、助成事業案件として毎年度公募し、第三者審査委員会の厳正な審査を経て採択される事業に、費用の一定割合を助成している。

2007年度から2015年度までの9年間に105事業

にのぼる様々な活動を支援し、2016年度には更に10事業への支援を予定している。事業内容は、国際博覧会へ参加する活動、国際的な環境教育活動、生物多様性への取組み、ESD活動(持続可能な開発のための教育)など多岐にわたっており、また実施団体であるNPO法人等の所在地も、愛知県はもとより、北は北海道から南は沖縄県にわたり、地域的にもバラエティに富んでいる。

また、ミラノ博への参加活動を内容とするものなど多岐にわたる内容である。

2007年度から2016年度までの助成事業は、62ページ以降の資料編に掲載している。

国内における事業

(3) モリコロライセンスセンター

当財団は、愛・地球博を記憶に刻むための記念事業として当財団名古屋事務所に2008年4月1日から「モリコロライセンスセンター」を開設し、博覧会の理念と整合し、その継承・発展に資する活用に対して、モリゾー・キッコロ等のキャラクターの使用を認める事業を行ってきた。モリゾー・キッコロの人気はまだまだ衰えず、全国津々浦々の環境イベントなどで活躍を続けている。2007年度から2015年度までの9年間のキャラクター使用許諾件数の累計は、1,600件を超える実績(1,644件)となっている。

使用される分野も、環境問題に関する意識啓発活動、自然再生・環境保護活動、青少年等への環境教育プログラム等バラエティに富む内容である。

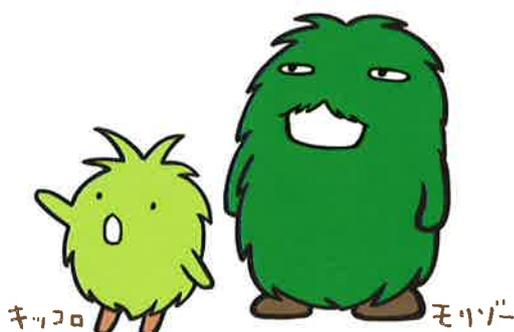
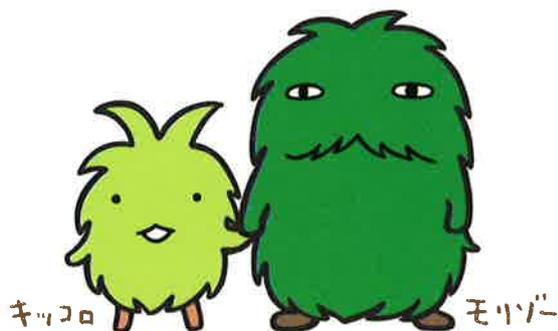
同じくモリゾー・キッコロの着ぐるみによる各種イベント等への出演の承認件数(承認日ベース)は、2007年度から2015年度の累計で1,300件を超える

実績(1,361件)となっている。出演した分野も、キャラクターの使用許諾と同じく、多岐にわたる内容となっている。

また、モリゾー・キッコロは国内外での重要な公式行事でも積極的に活用されている。具体的には、日本政府からの要請を受けて、2008年7月に北海道で開催された洞爺湖サミットでは「クールアースアンバサダー」に任命された。同じく、2012年開催の麗水博や2015年開催のミラノ博日本館のPRサポーターにも任命された。

また、2015年9月から11月まで開催された第32回全国都市緑化あいちフェアの「緑化特別大使」に任命された。

なお、モリコロライセンスセンターは、2013年12月に名古屋事務所の東京事務所への統合を行ったことから、現在、当財団の東京事務所内に開設し、事業を実施している。





国際博覧会への参画

(1) 2008年サラゴサ国際博覧会

2008年6月14日から9月14日までの93日間、スペイン・アラゴン州サラゴサ市でサラゴサ国際博覧会が開催された。「水と持続可能な開発」をテーマに、すべての命の源である「水」と人間、社会との新しい関係を、持続可能な形で構築するための地球規模の取り組みの重要性を全世界に訴えるこ

とを目的とし、100カ国を超える公式参加国に加えて国際機関、企業、NPOなどが多数参加した。GISPRIは「テーマ性」「メッセージ性」を重視した愛・地球博の理念・成果をさまざまな形で継承させるべく、7月21日のJapan Dayを中心に積極的な事業を展開した。

国際シンポジウムの開催

7月21日、サラゴサ博会場内の水の論壇（ウォーター・トリビューン）パビリオンで「気候変動と持続可能な水資源」をテーマに日本政府（経済産業省、JETRO）、国連の水関係2機関とGISPRIの共催で国際シンポジウムが開かれた。皇太子殿下から「水との共存一人々の知恵と工夫」と題し、自ら撮影された写真を交えて45分を超える特別講演をいただいたほか、気候変動に関する政府間パネル（IPCC）第3作業部会議長のバート・メッツ氏、国連食糧農業機関（FAO）局長のアレクサンダー・ミューラー氏らの基調講演、サラゴサ国際博覧会公社総裁のロケ・ヒスタウ氏らを交えたパネルディスカッションもあった。



国際シンポジウムでの皇太子殿下による特別講演

市民参加プログラムの実施

愛知で万博史上初めて生まれた新しい市民参加活動を継承するため、サラゴサ博では会場内に市民主導型パビリオン「El Faro (灯台)」が建設された。このパビリオンは全世界のNPOなどに開放され、運営はスペインのNPO法人ECODESが担った。GISPRIは会期中のJapan Dayを中心に前後2週間をAichi Weekとして確保し、展示場の一部や円形劇場を活用し、さまざまなプログラムを展開した。前半をNGOユニット、後半を市民ユニットとし、スタッフ、関係者を含め総勢70人を超えるメンバーが愛知を中心に日本全国から集結した。「対話と交流」を主眼に会場内で行ったすべての催しは来場者参加型が目指され、この結果El Faroは開幕以来最高の入場者数をAichi Weekで記録した。クロージングイベントでは2週間の活動の成果が総括されるとともに、ミュージカルチームも応援に駆けつけ、盛況裏に終了した。



市民主導型パビリオン「El Faro (灯台)」の全景



会場内円形劇場の満員の観客

国際博覧会への参画

ミュージカルの上演



座席も足りないぐらい観客があふれる

愛・地球博での公式マスコット「モリゾー・キッコロ」とサラゴサ博の公式マスコット「フルービー」が共演する子ども向けミュージカル「Manana あした」が会場内のバルコン・デ・ロス・ニーニョスで7月22-24の3日間公演された。当初は計6回の予定だったが、サラゴサ公社からの要望で1回追加され、計7回公演で2,600人を超える観客が楽しんだ。ミュージカルは「豊かな森と清らかな水を一緒に未来に」をテーマにスペイン語で制作された。初回公演には皇太子殿下がスペインの子どもたち約50人に囲まれて観覧され、ミュージカル終了後は子どもたちやモリゾーとキッコロ、フルービーとともに写真に収まった。



ミュージカルの模様

参加記念イベント

サラゴサ万博終了後、GISPRIが展開した事業を統括しつつ報告する記念イベントが名古屋市内で2回にわけて行われた。1回目は2008年11月8日、会場は名古屋市のナディアパークデザインホール。華麗なフラメンコに始まり、サラゴサ万博のGISPRIの活動報告映像、日本館の内容を紹介する映像と続き、El Faroパビリオンで市民ユニットが展開したパフォーマンスを軸に「僕たちのサラゴサー日本の水の愛し方」が上演された。サラゴサ万博での成果を次世代の若者につなげていこうとするこのチームの試みは、総勢80人を超える子どもたちの和太鼓、合唱の参加という形で実現され、会場から大きな拍手が寄せられた。愛・地球博ボランティアセンターのメンバーはモリゾー・キッコロの朗読劇を披露。サラゴサ万博で好評を博したモリコロとフルビーのミュージカルは今回の公演のために演出にも改良が加えられ、日本語バージョンとして華やかに上演された。会場のロビーでは市民ユニットのワークショップチーム、展示チームがそれぞれサラゴサ万博で展開した活動を紹介し、日本館で配られたサラゴ茶も提供された。

2回目のイベントは11月14日、名古屋市のテレピアホールでシンポジウムとパネルディスカッションの



ナディアパークの会場風景

形で行われた。サラゴサ万博のGISPRIの活動報告映像、日本館の内容を紹介する映像に引き続き、万博の意義やテーマを追求した事業展開の重要性、万博がもたらす国境を超えた交流の素晴らしさを強調したスピーチなどがあった。パネルディスカッションではスペインからECODES代表のビクトール・エド、サラゴサ万博公社のルシア・マリーノの両氏を招き、サラゴサに参加したNPOの代表らとともに万博の成果をどう将来に継承していくのかについて熱心な議論が繰り広げられた。ロビーではサラゴサに参加したNPOなどが活動紹介の展示を行い、あわせてサラゴサ日本館のVIPルームで飾られた生け花も再現された。



テレピアホールでのパネルディスカッション

国際博覧会への参画

(2) 2010年上海国際博覧会

上海万博は2010年（平成22年）5月1日から同年10月31日まで、中国上海市で開かれた。参加国、国際機関は万博史上最多の246を数え、敷地も328ヘクタールと万博史上最大だった。日本館は敷地面積約6,000平方メートルで、外国パビリオンの中では最大規模。「こころの和・技の和」を主要

テーマに日本の環境技術が結集された。

当財団はスペイン・サラゴサ博に引き続き、上海博においても、経済産業省、JETRO等と緊密な連絡を図りつつ、愛・地球博理念継承事業の積極的な展開を行った。

日本館への特別協力の実施

当財団は、JETROと協力しながら、日本館について、ゾーン2の展示空間づくり、広報活動等日

本館全般にわたり特別協力を実施した。

各種イベントの実施

当財団は、2010年5月14日から5月16日までの3日間、「未来へつながる愛・地球博」をテーマに、上海博会場内の日本館イベントスペースにおいて、次のイベントを実施した。

第1夜 PAST「悠久の響き」
～日中のつながり～

第2夜 FUTURE「未来の子供たちへ」
～万博の想いを未来へ～

第3夜 ACROSS「海を越えるバトン」
～スペシャル・フィナーレ～

①モリゾー&キッコロミュージカル

タイトルは「モリゾー&キッコロミュージカル in 上海博〈ココロのまほう〉」。環境に配慮した世界を創るには人間一人ひとりの心がけが大切であることを訴える家族向けミュージカル。モリゾー・キッコロが森の動物たちと、自然を汚す魔女たちに立ち向かうストーリーで、劇中、海宝の映像も使われた。2日間で6回の上演を行った。

③日中交流プログラム

上海日本人学校（虹橋校・浦東校）の児童生徒と上海市の日新実験小学校の児童総勢500名が参加し、競演しながら、演奏、舞踊、合唱を通じて、日中の架け橋を目指す交流プログラムを繰り返し、1日6回のステージを行った。

②心連心コンサート

「心連心（こころとこころをつなぐ）コンサート」を3夜連続で公演。このコンサートには、平原綾香、姉尾武、笹子重治、馬暁暉、巫慧敏（amin）、日中スペシャルユニット天平楽府、中国の合唱団等が出演。プログラムは次のとおりであった。

④市民参加プログラム

愛・地球博やサラゴサ博に参加し、愛・地球博成果継承発展事業にも取り組む市民グループ「対話パフォーマンス絆」が、上海博への市民参加プログラムとして、和太鼓の力強い演奏を行う、2日間で4回の公演を行った。



モリゾー・キッコロミュージカル in 上海万博「ココロのまほう」



ハートのカードを手にミュージカルを楽しむ観客



中国と日本の伝統音楽で盛り上がった心連心コンサート



1日午前、上海万博の日本館で、入場を待ち並ぶ人たち（共同）

上海万博 7000万人来場目標

【上海】小坂井文彦「史上最多の二百四十六の国・国際機関が参加する上海万博が一日、開幕した。開催は十月末までの百八十四日間。会場は黄浦江を挟んで兩岸に三百二十八軒で史上最大規模。来場者も最多の大阪万博（一九七〇年）の約六千四百二十万人を越す七千万人以上を算定。日本からは日本館、日本産業館、大阪府出展している。■開催地

同日午前八時半、八日五目当てのハリオン本時間九時半の開を自指して駆けだし開式では、マスコットだ。

■開式と中園内少 万博事務局は四日下敷民族の衣装を授け、約四十万人を動員した。参加園は、タリハールを主軸の園を統括して開催。イタリア館が、祝った。同日九時に開演。割られ、入場ゲートが、未明から長蛇の列。湧ける観客が起きた。つくった数万人が、開幕初日は二連休の始

「愛知」も継承、開幕

【上海】地田達「上海万博が開幕した二日朝、名ハリオンも開催した。日本館では、旭山紀夫首相の特使である山崎出入向家戦略担当相が多くの人に訪れて、一日中の相見解が二ことを持する。まひさう。

【上海】地田達「上海万博が開幕した二日朝、名ハリオンも開催した。日本館では、旭山紀夫首相の特使である山崎出入向家戦略担当相が多くの人に訪れて、一日中の相見解が二ことを持する。まひさう。

日本館2時間半待ち

【上海】地田達「上海万博が開幕した二日朝、名ハリオンも開催した。日本館では、旭山紀夫首相の特使である山崎出入向家戦略担当相が多くの人に訪れて、一日中の相見解が二ことを持する。まひさう。

【上海】地田達「上海万博が開幕した二日朝、名ハリオンも開催した。日本館では、旭山紀夫首相の特使である山崎出入向家戦略担当相が多くの人に訪れて、一日中の相見解が二ことを持する。まひさう。

中日新聞
夕刊
中日新聞社
本社：東京都千代田区三ツ又1-15-15
〒100-8511 電話：03-2011-6811

2010年5月1日中日新聞掲載

国際博覧会への参画



心連心コンサートには上海の子どもたちによる合唱団も出演し、美しい歌声を響かせた



日本と中国の子どもたち計500人が参加した日中小学校交流プログラム

上海万博 モリコロも歓迎



上海万博会場内に飾られたモリゾーとキッコロのからくり人形=上海で (小坂井文彦撮影)

「環境・交流」愛知の理念広げ

【上海=小坂井文彦】愛・地球博(愛知万博)のキャラクター、モリゾーとキッコロのからくり人形が上海万博にお目見えした。飾られたのは、浦西会場の万博博物館。愛知万博後に人形は寄贈され、二〇〇六年十一月から上海市の上海科学博物館に譲られていた。●面参照

からくり人形登場

上海の日本通からは早速「モリコロじゃないか」と愛嬌のあ

「愛知で掲げた環境の理念を上海でも引き継いで」。愛知万博で日本国際博覧会協会会長を務めた豊田章一郎トヨタ自動車名誉会長は三日、万博跡地に愛知県などが整備する先瀬研究施設の起工式に出席。当時とは様変わりした跡地に目をやりながら、上海万博の開幕にエールを送った。

豊田氏は、上海万博開催前に会場を視察したといい、「大変立派な施設だった」と満足。「きっと成功するぞ」とシャバンウー(よ)と太鼓判を押し、上海に再び訪れると誓った。

跡地、公園づくり進む 中核施設10月オープン

・地球博記念公園(モリミスト、太陽光や風力発電コロボック)として再整備、外気を地下に送って備を始めた。将来設計や、館内に取り入れる空調な管理手法は、万博で活躍ど、自然利用のエネルギーにした市民パワーを巻き込んできた。技術を取り入れて理念を継承する。

「環境と交流」という万博理念を継承するため公園づくりが進んでいる。十月には、跡地利用の中核施設となる「地球市民交流センター」がオープンする。

愛知万博では、愛知青少年公園を長手会場として活用、開館後に、愛

中核施設の「交流センター」は、体育館や研修場(10)でも、市民参加のイベント会場として活用する。生物多様性条約第十回締約国会議(COP10)も、市民参加のイベント会場として活用する。

(3) 2012年麗水国際博覧会

2012年麗水国際博覧会（麗水博）は、2012年（平成24年）5月12日から8月12日まで、「生きて
いる海、息づく沿岸：資源の多様性と持続可能な

活動」をテーマに、約110の国・地域・国際機関が
参加して朝鮮半島の南端にある麗水市に建設され
た25ヘクタールの会場で開催された。

日本館への特別協力

「森・里・海」の連環による豊かな海づくりを紹介
するレリーフジオラマ及び日本科学未来館（毛利衛
館長）の協力を受けた「海の未来、地球の未来」を
紹介する地球スクリーンを制作し、日本館ゾーン3
（知恵と技の「里」）に展示した。

①「森・里・海」の連環による豊かな海づくり （レリーフジオラマ）

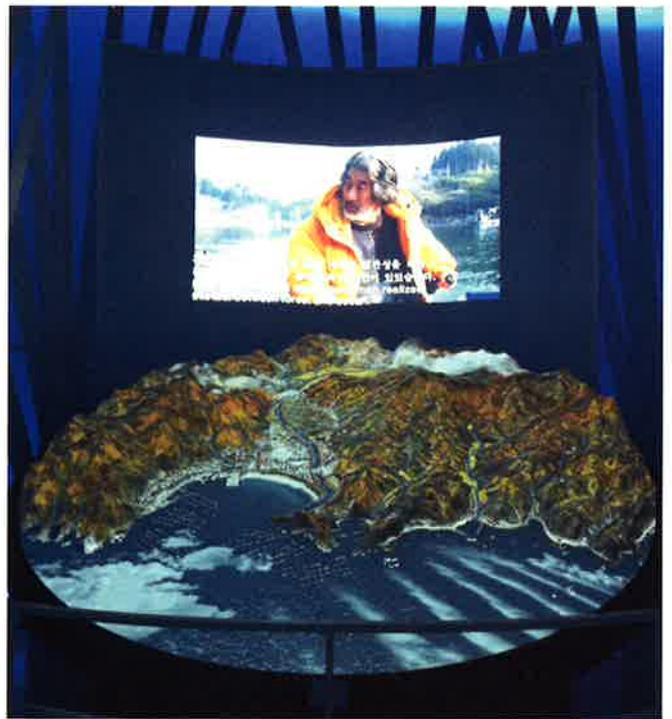
季節ごとの自然の営みや川を通じて森と海がつ
ながる姿と森に木を植える人々の活動が海を豊か
にすることになるといった自然との共生の重要性を
レリーフジオラマによって発信した。

②「海の未来、地球の未来」地球スクリーン

モリゾーとキッコロがナビゲーターとなり、世界
各地から集められた最先端の科学データに基づく
地球環境の将来予測や2011年の東日本大震災に
おける大津波のシミュレーション、未来に向かって
自然との共生に取り組むことの重要性等を直径
3mの半球形型スクリーンに投射した映像によって
発信した。

③モリゾー・キッコロの出演

モリゾー・キッコロは、経済産業省から日本館
をPRするサポーターの一員に任命され（平成24年
1月18日）、麗水博の会場内外で活躍した。
（日本館のサポーターは、タレントの草薙剛さん等
8名とモリゾー・キッコロ）



日本館ゾーン3レリーフジオラマ



日本館ゾーン3地球スクリーン

国際博覧会への参画

ジャパンデーでのステージプログラム

平成24年6月2日のジャパンデーにおける公式プログラムの一つとして、麗水博会場内のエキスポホールにおいて、当財団主催により、EXPOの歴史と「自然の叡智」についての映像と歌で表現した特別公演「EXPO STORY SHOW 森里海そして未来へ」を開催した。

同公演は、モリゾー・キッコロがナビゲーターになって万博の歴史の物語を映像で紹介し、葉加瀬太郎さん、ゴスペラーズ、玉城千春 (Kiroro) さん & 韓国の子供達のアーティストライブや出演者全員の合唱で会場を一つにするエンディング等の充実

した内容であり、多くの来場者から共感、好評を得ることができた。



GISPRI主催ジャパンデー特別公演

愛・地球博理念継承シンポジウム2012 in 麗水の開催

平成24年6月16日に麗水市の麗水市鎮南文芸会館において、「市民参加」が切り開く博覧会成果の

継承（地域から世界規模まで、社会の課題解決を可能とする市民参加を考える）をテーマとする国際シンポジウムを開催した。

同シンポジウムでは、NPO法人「森は海の恋人」理事長の畠山重篤氏、NPO法人愛・地球博ボランティアセンター理事長の榎田勝利氏をはじめ、日本、韓国等の有識者の参加を得て、両国で取り組まれている「海づくり」を通して、森・里・海のつながりを紹介すると共に、愛・地球博以降の万博で市民参加が果たした成果とその継承、発展をレビューし、発信した。またBIEからビデオレターをいただいた。



シンポジウムの一場面

広報映像制作

モリゾー・キッコロと麗水博キャラクターのヨニ・スニの共演する「モリゾー・キッコロ森へ行こうよ！麗水博特別編」を制作した。

映像は、「モリゾー・キッコロとヨニ・スニ 麗水万博に行こうよ」（10分）と「モリゾー・キッコロとヨニ・スニ 麗水万博海を越えたメッセージ」（30分）の2本である。

内容は、両キャラクターがコラボレーションしながら、麗水博会場を縦横無尽に動き回り、麗水博の概要、日本館の紹介などを行い、併せて愛・地球博から麗水博への道程、歴史などを平易に解説

する映像である。技術的には会場の実写映像にキャラクターのCG映像を重ねたものである。



「モリゾー・キッコロ森へいこうよ！麗水博特別編」の画像

同映像は、NHK教育放送 (Eテレ) で、前者の作品は平成24年6月9日に、後者の作品は7月8日に全国放送され、それぞれ高い視聴率を獲得した (6月9日の視聴率:1.1%、同じく7月8日:1.8%)。また同映像はNHKワールドプレミアムを通じて

計5回、世界に向けて放映された。

さらに、麗水博組織委員会の要望により、コンテンツを韓国語版に翻訳、再編集し、同博覧会の広報用映像等の素材として提供した。

(4) 2015年ミラノ国際博覧会

ミラノ国際博覧会は、2015年 (平成27年) 5月1日から10月31日まで、「地球に食料を、生命にエネルギーを」をテーマに、約140の国・地域・国際機関が参加してイタリア共和国ミラノ市郊外の約110ヘクタールの会場で開催された。

ミラノ博の入場者数は、目標を2,000万人として

いたが、最終的には2,150万であった。その内、人気のあった日本館には228万人が来館した。加えてBIEが主催するパビリオン・プライズで、日本館が展示デザイン部門で「金賞」を受賞した。

当財団も、日本館への展示協力など種々の事業を実施した。

日本館サポーターの任命等



2013年12月17日のミラノ博開催500日前イベントにおいて、日本館サポーターの任命式が行われ、当財団の南直哉理事長及びモリゾー・キッコロに対し林芳正農林水産大臣及び茂木敏充経済産業大臣名の任命状が交付された。

2013年12月17日の2015年ミラノ国際博覧会開幕500日前「日本館プレス発表会」において任命式で、日本館をPRするサポーターにモリゾー・キッコロが任命された

日本館への展示協力

当財団は、ミラノ博のテーマである「地球に食料を、生命にエネルギーを」のソリューションを示す展示物を制作し、日本館シーンⅢイノベーション (Innovation) に展示した。その内容は、「フューチャー・グローブ・ステージ (Future Globe Stage)」と「触れる地球 (Interactive Globe)」で構成されている。

世界の食糧に関し、飢える開発途上国の一方で、先進国では飽食と食料の浪費という不均衡な地球的課題と日本が示す多くのソリューションを来館者に

理解しやすいかたちで提示しようとしたものである。

大型スクリーンの「フューチャー・グローブ・ステージ」では、モリゾー・キッコロ等の様々なキャラクターが登場し、地球が抱える課題に対する日本の数々のソリューションを情緒的なストーリーに織り交ぜて、アニメでわかりやすく紹介した。

また、日本の伝統の知恵と最新技術によって具体的にどのように解決していくか、多くのソリューションを「触れる地球」という装置を活用して、来館者に理解できるかたちで提示した。

国際博覧会への参画



展示空間イメージ
現代の地球が抱える様々な問題を可視化し、課題解決に向けた日本の最先端の技術開発や国際貢献の取り組みを未来ビジョンと共に紹介するフューチャーラボ空間



実際の来場写真

GISPRI主催の文化公演「Japan Dayスペシャルライブ2015」

ミラノ博において、7月11日に日本のナショナルデーである「ジャパンデー」が盛大に開催された。

同日の公式行事の一環として当財団主催、日本館共催による文化公演「Japan Dayスペシャルライブ2015」が17時半からミラノ博会場内の「オーディトリウム」で開催された。

本公演は、日本を代表する古典・伝統芸能とク

ルジャパンをコラボレーションした内容で、開場2時間前には収容人数を上回る観客が列をなし、立ち見が出るほど大盛況だった(来場者数:787名、席数:670席)。

また、ミラノ博日本館のサポーターであり、「愛・地球博」のマスコットキャラクターである新型のモリゾー・キッコロも出演し、舞台を盛り上げた。

【プログラム】

1. オープニング「風翔音 (フュージョン)」

(吉田兄弟の津軽三味線の演奏)

2. 「書」と「和太鼓」のコラボレーション

(書家の紫舟さんと和太鼓グループの打打打団
天鼓による「書」と「和太鼓」のコラボレーション)

3. 日本最高位の能舞台「高砂」

(宝生流第20世宗家宝生和英氏)

4. KAWAIIカルチャーLIVE

(きゃりーぱみゅぱみゅさんのスペシャルライブ)

5. フィナーレ (出演者全員)



モリゾー・キッコロが出演



吉田兄弟の津軽三味線の演奏



紫舟さんと打打打団天鼓による「書」と「和太鼓」のコラボレーション



宝生和英氏による能舞台「高砂」



きゃりーぱみゅぱみゅさんのスペシャルライブ



国際博覧会への参画

日本館イベント広場等でのGISPRI催事の実施



8月18日、19日にミラノ市内の中心部にあるミラノ商工会議所において、及び19日から22日の4日間、日本館イベント広場において、チームラボと連携して、参加者が描いた人や動・植物のぬり絵がスクリーン上で動くデジタルコンテンツ、「お絵かきNATURE LAND～モリコロと一緒に遊ぼう～」を実施した。

両会場の来場者は1万人余り、その内体験者は約3,400名と大盛況であった。

愛・地球博助成事業によるミラノ博覧会事業への支援

助成事業申請のうち、ミラノ博覧会関係として次の5団体の案件を採択し、助成を行った。(詳細は76～78ページ参照)

- ・輪島商工会議所 (漆器の出展等協力事業)
- ・小浜商工会議所 (国際交流子ども料理教室による環境教育事業)

- ・中部圏社会経済研究所 (発酵食文化の国際交流モデル事業)
- ・日本陶磁器産業振興協会 (食卓を通じた国際交流出展事業)
- ・TABLE FOR TWO International (自然との共生を体現するスローフードの調査・発表事業)

(5) アスタナ博以降の国際博について

アスタナ博覧会

2017年6月10日から9月10日まで、欧州と中央アジアにまたがるカザフスタン共和国の首都アスタナで国際博覧会(テーマ:未来のエネルギー)が開かれる予定である。我が国は、2015年2月20日、正式な参加表明が閣議了解され、幹事省は経済産業省、副幹事省は文部科学省、国土交通省及び

環境省となった。

また、2015年5月から7月にかけて、経済産業省、JETROが開催した「アスタナ国際博覧会日本館基本計画策定委員会」に当財団から蔵元専務理事が委員として参画した。

ドバイ博覧会

2020年10月20日から翌2021年4月10日まで、中東のアラブ首長国連邦(UAE)の都市ドバイで、

中東で初めての国際博覧会(テーマ:心をつなぎ、未来を創る)が開催される予定である。



BIEとの連携

当財団は、BIEと密接な交流、連携を行っている。

2009年7月18日から8月31日までの6週間、国際博覧会事務局 (BIE、パリ) 主催の「EXPO×EXPOS—国際博覧会の歩み、そしてこれから」が愛・地球博記念公園 (モリコロパーク) 内の愛・地球博記念館で開催された。GISPRIは共催者として愛知県や財団法人愛知県都市整備協会、愛・地球博ボランティアセンターなどの協力を得て全期間にわたり会場運営にあたった。期間中は約3万人が来場し、150年にわたる国際博覧会の歴史に触れ、多くの人々が初めて見る映像やパネルに関心を寄せた。この展示は2008年2月にイタリア・ミラノでスタートし、マドリッド、リスボン、サラゴサ、ブリュッセルというヨーロッパの国際博覧会開催地を巡り、日本での開催となった。また併催事業として愛・地球博開幕4周年記念事業「愛知・大阪二大万博と日本の博覧会展」が長久手町文化の家で開催。幅広い世代の来場があり、4年前の愛・地球博と1970年の大阪万博を懐かしむ姿が多く見られた。

愛知での開催後、2009年9月19日から10月18日には大阪万博の跡地である大阪府吹田市千里の万博記念公園の「鉄鋼館」で開催された。台風の上陸で10月8日は閉園されたが、延べ26日間で約1万4,500人の来場があった。

2010年3月に万博記念館としてリニューアルオープンした鉄鋼館では、40年前に製作されたオブジェ兼楽器「池田フォーン」が復元され、演奏会が催された。併催事業として「愛知・大阪二大万博と日本の博覧会展」が行われたほか、2015年に開催が予定されているミラノ万博のブースが設置された。さらに会期中、上海世博会から上海万博公式マスコット「海宝 (ハイバオ)」の大型ぬいぐるみが贈呈された。

それ以降もBIEとの交流、連携を継続して実施している。

2010年上海博、2012年麗水博及び2015年ミラノ博の開催地でBIEと様々な交流を行うと共に、国内行事においても、2009年9月に開催した「愛・地球博感謝の会」や2012年10月に開催した「愛・地球博の理念を未来につなげる会2012」にもBIEの代表者に参加いただいた。

そして2015年 (平成27年) 3月28日に開催した愛・地球博開幕10周年記念式典・催事 (詳細は15ページ参照) においても、ロセルタレス事務局長に参加いただいて祝辞をいただくと共に、BIEと当財団の今後の交流、連携について意見交換を行った。

同氏から、開幕から10年を経ても持続して実施されている愛・地球博理念継承活動への高い評価と敬意が表明されると共に、当財団とBIEとの今後の更なる交流、連携についての期待が表明された。



愛・地球博記念館でのオープニングセレモニー



いつまでも続く愛知の情熱

閉幕4周年を控えた2009年9月13日、博覧会の運営に携わった関係者による「愛・地球博感謝の集い」が名古屋国際会議場で開かれた。博覧会協会の歴代役職員、各パビリオンの職員ら約1,500人が集い、会場いっぱい懐かしさの熱気があふれ

た。参加者がそれぞれのグループごとに紹介され、パビリオンごとにアトラクションも披露された。特に当時のユニホームを身にまとったパビリオンのアテンダントが会場を一層華やかにした。



愛・地球博感謝の集い

愛・地球博拡大同窓会の開催

愛・地球博の開催のために各分野の業務に携わった関係者が再会し、当時の仕事を振り返り、成功に導いた全員の努力を想起することを目的とし

て、2011年4月16日に愛知県の愛・地球博記念公園内の地球市民交流センターにおいて、約1,000人の参加を得て愛・地球博拡大同窓会を開催した。

愛・地球博の理念を未来につなげる会2012の開催

愛・地球博の開催から7年が経ち、愛・地球博の開催準備や運営に携わった多くの関係者が一堂に会して愛・地球博の理念の継承を確かめ合い未来につなげていくことを目的に、2012年10月7日に愛

知県名古屋市名古屋国際会議場イベントホールにおいて、1,000人近い関係者の参加を得て「愛・地球博の理念を未来につなげる会2012」を開催した。

10周年記念式典及び催事の開催

2015年(平成27年)は、2005年に開催した愛・地球博から10年という大きな節目に当たり、この節目の年に愛・地球博の理念を今後も確実に継承発展させ未来に繋げていくため、平成27年3月28日、

愛知県体育館において、記念式典及び催事を開催し、記念式典には、約1,400名の愛・地球博実施関係者が参加し、また記念催事には公募した一般の方を含め約3,300名が参加した。(詳細は15ページ参照)



持続可能な 社会づくりのための技術

21世紀の地球的課題（地球温暖化や環境問題）の解決に役立つ最先端技術が、愛・地球博では会場のあちらこちらで目にする事ができた。いや、目にするだけでなく、実際に運用されていたし、来場者が体験することもできた。そこに誰もが未来社会への希望や期待を抱いたはずである。博覧会が終了して10年、それらの技術は現代の社会に根付き始めており、われわれは明るい未来に確かな一歩を踏み出している。



新エネルギーは本格的な普及段階へ

博覧会の理念であった持続可能な社会づくりは、地球規模で解決すべき課題として重要性を増し、政治や経済分野を含めた取り組みが進められている。なかでも太陽光発電や風力発電、バイオマス発電などの「新エネルギー」の普及には各国政府が積極的に推進しており、新たな市場や雇用を創出する成長産業として期待を集めている。

日本政府も2013年度の我が国の全エネルギーの4.3%程度にとどまっている新エネルギーの割合を、2030年度には10%程度にまで引き上げる考えであり、自治体や事業者、一般家庭に対する支援策を拡充。民間もこれを商機とみて家電・住宅メーカーを中心に技術開発や普及促進に力を入れている。

こうした動きの先取りであった愛・地球博での新エネルギープラントは閉幕直後の2005年10月、愛知県常滑市の中部国際空港対岸部の通称「中部臨空都市」に移設され、独立行政法人新エネルギー・産業技術開発機構（NEDO）が中心となって地元の常滑市役所や常滑浄化センター（下水処理場）に電力を供給しながらの実証実験が続けられた。

NEDOの同プロジェクトは2008年3月まで続け



博覧会場のエネルギープラントの一部

られ、プラントは愛知県に無償譲渡された。県は実証研究を引き継ぐとともに、プラントを新エネルギーについての情報発信や研究・学習拠点施設として整備し、「あいち臨空新エネルギー実証研究エリア」として2009年2月に再オープンさせた。

同施設には共用設備として多結晶シリコン型など3種の太陽光発電システム、新エネ体験館などがあり、実証研究施設として、集光型太陽光発電プラントや電気自動車用充電器、風力発電、バイオエタノール生産設備、遮熱ネットなどを備えた。



愛知県常滑市内2例目となった太陽光発電所

集光型太陽光発電は他の太陽光発電に比べて変換効率が高く、晴天時にはシリコンを用いた太陽電池の約2倍の能力がある。研究としては多数の発電システムを連結した場合の発電性能、消費地への長期にわたる電力供給の可能性を調査した。

風力発電は2013年から、翼が2枚の垂直軸型の装置を用い、風車の始動性と発電特性を研究した。

その後、「あいち臨空新エネルギー実証研究エリア」は2015年3月まで継続され、その研究成果は愛知県豊田市と瀬戸市にまたがる博覧会跡地にある「知の拠点あいち」の敷地内に新たに「新エネ

ルギー実証研究エリア」を整備して、移転を進めている。

「知の拠点あいち」は付加価値の高いモノづくりを支援する研究開発拠点で、2010年に整備が始まり、現在「あいち産業科学技術総合センター」と「あいちシンクロtron光センター」が稼働している。

新たに整備を進めている「新エネルギー実証研究エリア」は2014年に着工し、2015年度中にオープンする。敷地面積は1.2ヘクタールで、このうち0.2ヘクタールに「あいち臨空新エネルギー実証研究エリア」にあった太陽光パネル900枚を移転する。実証研究をする企業は新たに公募し、合わせて0.8ヘクタールのエリアで4～8社が研究を行う見込みだ。

一方、「あいち臨空新エネルギー実証研究エリア」にあった新エネ体験館の太陽光発電、風力発電、人力自転車発電、燃料電池の各体験コーナーや企業展示の一部はすでに、「知の拠点あいち」にある「あいち産業科学技術総合センター」内に移転して稼働している。また、事務所機能も移転を終えている。



「あいち産業科学技術総合センター」の人力自転車発電の体験コーナー



新エネルギー実証研究センターの敷地全景



ドライミストのその後



愛・地球博会場に設置されたドライミスト

真夏の博覧会場を白い霧で包み、涼しさを演出した「ドライミスト」。環境万博の象徴としてのインパクトは大きく、閉幕後は全国各地のイベント会場や公共施設、一般のビルなどで取り入れられている。

博覧会場のドライミストは閉幕後の2006年に、愛知県安城市の安城産業文化公園デンパークの敷地内2カ所に移設され、現在も稼働している。同年には東京・六本木ヒルズやJR秋葉原駅前の再開発ビル、東京駅丸の内北口、北海道・函館の五稜郭タワー、福岡・太宰府天満宮のほか、岐阜県

多治見市と並んで「日本一暑い町」として知られる埼玉県熊谷市でも猛暑対策として駅前通路などに導入された。名古屋市でも2008年夏に再開発ビルのオープンエリアに設けられ、ビル街の一角に人工の霧が立ち込める光景が夏の風物詩となっている。その後、横浜市の相模鉄道二俣川駅、首都高速道路中央環状線・山手トンネルなどに設置された。

多治見市では2012年にJR多治見駅南広場にドライミストが設置され、その後筑波大計算科学研究センターと市が合同でドライミストの効果を調査している。2013年にはJR東日本が東京駅北口に整備した施設「グランルーフ」の歩行者デッキにドライミストが導入され、憩いの空間を演出している。

ドライミストは博覧会開催の3年ほど前から研究が始まった。産官学の連携によって、博覧会までに16マイクロメートルの水滴を発生させる技術を確認。屋外でも周囲の温度を2、3度下げる効果が確認され、グローバルルーフでの導入に至った。その後の2008年サラゴサ博、2010年上海博、2012年麗水博及び2015年ミラノ博でも導入された。



JR多治見駅前で噴射されるドライミストに手を当て涼を感じる子どもたち



JR東京駅のグランルーフにもドライミストが導入され憩いの空間を演出する



画期的なバイオラングとITS

愛・地球広場に面して“緑の壁”を出現させた「バイオラング」は、植物の力を新たな形で活用し、快適な都市づくりを目指す先進技術として大きな反響を呼んだ。すでに造園業界などで確立されていた技術のほか、この機会に開発・提案された技術も少なくなかった。それらを150メートルの長さ、最大15メートルの高さの壁面に集積させ、約200種20万株以上の草花や樹木を半年間に渡って管理した意義と成果は大きく、業界では「バイオラング以前」「バイオラング以後」と表現されるほどの画期的なプロジェクトだった。

博覧会の成功を受けた愛知県では県立体育館の壁面などがバイオラングとして緑化された。環境づくりに貢献しているというイメージアップの効果を見込んで商業施設に全面採用したり、企業の広告と一体化させたりする事例が最近の傾向だ。身近なものとしては2011年に大阪市の企業が家庭やオフィス向けに観葉植物を木枠に収めて壁を彩るバイオラングのミニチュア版を開発、販売している。

2015年9月から11月に愛知県の愛・地球博記念公園（モリコロパーク）で開催された「第32回全国都市緑化あいちフェア」では会場内に緑化壁のコーナーが設けられ、9企業がバイオラングの最新技術を展示した。

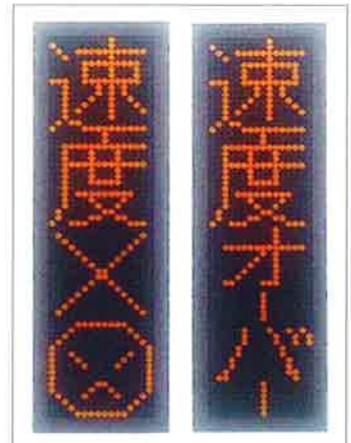
ITS (Intelligent Transport Systems) は「高度道路交通システム」と訳され、道路交通における事故や渋滞、環境対策などのさまざまな課題を最先端の情報通信や制御技術によって解決するシステム。その究極の姿は、人間が手を出さなくても乗り物が自動的に目的地にまで運んでくれる「自動運転」である。博覧会場で無人バスが隊列を組んで走ったIMTS (Intelligent Multimodal Transit Systems) は当時最先端のITS技術であり、未来的な1人乗り自動車として話題になった「i-unit」も広い意味でこのシステムに含まれる。IMTSの技術は、現在、前の車に接近すると自動的にブレーキがかかる運転支援システムに活かされている。

国もIT国家戦略の一つとしてITSを全面的に推

進しており、全国の自動車専用道路などでETC (自動料金収受システム) が普及。都市部では公共交通運行管理システムの構築も進みつつある。また2013年、政府が成長戦略に自動運転システムの推進を盛り込んだことから、各自動車メーカーは高速道路でドライバーが運転操作をしなくても走行できる自動運転車などの実用化を進めている。

磁気マーカーの埋め込まれた専用道を自動走行する技術は、路上の白線をはみ出すと警告を出す機能に発展し、一部の市販車に搭載されている。2014年には自動車部品大手のデンソーが、自動車

が急増するタイでITSの共同研究を始めている。一方、ITSによって事故防止を図る取り組みも行われている。愛知県は2014年度から「ITSを活用した安全・安心な地域づくり」を目指して、知事兼会長とする愛知県ITS推進協議会を立ち上げ、豊田市と刈谷市にある時速30キロ制限の生活道路で、制限速度を超えた車に電光掲示板で警告する全国初の実証実験を始めた。



時速30キロを超えると表示される警告

危険知らせる運転支援

トヨタ自動車は2015年、交差点での交通事故を防止するため、車や交差点に設置した通信機を活用し、ドライバーに危険な状況を知らせる技術を世界で初めて実用化したと発表した。高度道路交通システム（ITS）を生かし、自分からは見えない車や歩行者の位置を把握できる。価格は五万円以下で、年内に発売する3車種に搭載する。

この技術は、交通支援システム「ITS-Next」。交差点を右

トヨタ、搭載3車種 年内投入

折る際、道路に設置したセンサーが対向車や歩行者の位置情報を把握して無線で車に送信。ドライバーが歩行者の接近を察知している場合などに、メーターの画面表示とブザーで注意を促す。赤信号でスリットを落とした時にブザーで注意喚起する。信号の待ち時間を表示もする。

通信機を搭載した前後の車両同士でも加減速の情報をやりとりし、一定の車間距離を保って走行できる。通信機を搭載した救急車が近づくと、距離などを伝える機能もある。道路上にセンサーが設置されているのは東京23区と名古屋、豊田市の二十九所、二〇一五年度末には五十カ所に増える見通し。

トヨタはシステムの搭載車種を順次増やす。通信規格は国内で統一しており、他の自動車メーカーの参入も可能。搭載車両が増え、道路のセンサー整備が進めば、事故防止や渋滞の緩和などに役立つ。



世界に先行するバイオプラスチック利用

循環型社会を目指すモデル事業として博覧会を代表した実証実験が「バイオプラスチック」の導入だった。会場内のレストランなどでワンウェイ（使い捨て）タイプの食器類約2,000万個、リターナブル（繰り返し利用）タイプ約12万個が使われたほか、長久手日本館の外壁や場内のサイン、包装紙やゴミ袋などにも導入。食器類は食べ残しと一緒に回収、会場外でたい肥化処理され、農作物の肥料として再利用された。リターナブルタイプの食器の一部は閉幕後、中央の6府省と全国25の府県庁に提供された。

「世界最大規模の実証実験」とも称されたこのプロジェクトで、バイオプラスチックに対する関心や認知度は飛躍的に高まった。バイオプラスチックには、微生物の働きによって水と二酸化炭素に分解される機能が特徴の「生分解性プラスチック」と、植物など再生可能な有機資源を原料につくり出される「バイオマスプラスチック」がある。博覧会当時はまだこれらの区分があいまいだったが、プロジェクトを契機に業界団体による制度化が進み、これまで生分解性プラスチックに適用していた「グリーンプラ識別表示制度」に加え、バイオマスプラスチックを認証する「バイオマスプラ識別表示制度」が2006年7月に制定。これは日本が世界に先駆けた取り組みとなった。

耐久性や柔軟性に欠ける点が問題となっていたが、年々改良が進んでいる。グリーンプラは水切りネットや肌にやさしい衣料品、フィルムやシート、惣菜入れや洗剤用ボトル、ボールペンなどに。しかし日本ではグリーンプラが割高であることなどから、コスト面での改良が急がれる。



博覧会場で長久手日本館の外壁に使われていた生分解性プラスチック

バイオマスプラスチックは家電製品のブリスターパック、生鮮食品のトレー、ポイントカード、家電製品のボディー、自動車の内装材など、用途は広がりつつある。2011年には梅の生産量日本一の和歌山県の会社が、梅の種からバイオマスプラスチックをつくり、プラモデルとして売り出した。総合スーパーのユニーは2012年にサトウキビ原料のバイオプラスチックを25%利用したレジ袋を導入している。



新たな社会を 動かすエンジン

環境に優しい持続可能な社会の実現には、最先端技術の導入だけでは十分ではない。愛・地球博では、自然環境に配慮した新たな社会行動や社会システムを会場内で採用し、循環型社会を目指す上で、最も難しいとされる人々の意識変革や、大量消費、大量廃棄にならされてきたライフスタイルを変革するきっかけづくりを行った。さらには、世界の多様な文化とふれあうことにより、地球市民の多様性に気付き、それらを理解し、相互に認め合う。このことこそが重要であることも示唆していた。異なった文化との積極的な交流の中こそ人類の未来があるのだ。愛・地球博を機に芽生えたこれらの意識は、次第に市民に根付いてきている。



EXPOエコマネー普及に知恵

環境教育プログラムへの参加や買い物時のレジ袋を断るなどの行動を経済ポイント化し、エコ商品との交換や植樹への寄付を行う環境通貨「EXPOエコマネー」は会期中、目標の4倍となる約60万人が会場内のEXPOエコマネーセンターに来場し327万ポイントが発行された。レジ袋辞退などによる二酸化炭素削減効果は約233トンに及んだ。持続可能な新しい社会システムの構築に、身近な経済行為から参加できる可能性を市民に実感させた。

閉幕後、システムの運営は名古屋市のNPO法人「エコデザイン市民社会フォーラム」が主体となって継続。博覧会場にあった拠点施設のエコマネーセンターは2005年11月、名古屋市中区の金山総合駅前へ移動、来館者への説明やエコ商品との交換などの作業にはボランティアが積極的に協力。イベントやセミナーなどを継続的に開いて普及啓発に努めた。センターの事務機能は2013年6月、同市東区代官町へ移った。2014年12月現在、愛知県内のエコポイントセンター、同サテライトは計15カ所となっている。

ポイント発行数は愛・地球博覧閉幕後、一時低迷していたものの、豊田市が2011年、エコ商品だけでなく、市内で使える商品券にも交換できるように制度を変更した。こうしてさまざまな知恵や工夫を凝らし、2014年末までにEXPOエコマネー利用者は博覧会時代からの累計で約63万人に達し、ポイント発行数は約5,100万、そのうち約1,200万



金山にあったエコマネーセンター

ポイントが植樹や緑化事業に寄付されている。

豊田市はEXPOエコマネーの仕組みを活用して、さまざまな分野での環境配慮行動に対して、独自のポイント制度「とよたエコポイント」を実施している。希望者は「エコファミリー」に登録、ポイント発行対象はリサイクルステーションなどへの資源の持ち込みのほか、公共交通の「おいでんバス」の乗車、環境学習への参加など多岐にわたる。地元の特産品や商品券などとの交換や森づくりなど環境保全活動への寄付など、使い方はさまざま。また、「エコファミリー」は、住宅用太陽光発電システムなどスマートハウスの促進や次世代自動車の普及のための補助金が受けられる。



愛知県のモデル事業の最終年度に開かれた「エコマネーフォーラム」で取り組みの効果を発表する学生=2009年3月



回収機にペットボトルを入れる市民。1本ごとにエコマネーにポイントがたまる=豊田市内のリサイクルステーションで



ごみ削減で官民取り組み

循環型社会に向けた第一歩として博覧会で本格的に実施されたごみの分別や削減。環境意識の高まりにともない、その取り組みは全国レベルで進められた。なかでも名古屋市は「レジ袋有料化」を愛・地球博の発展事業として位置付け、全国的にも際立つ力の入れようを見せた。

市は愛・地球博に先立つ2001年、市民団体や事業者団体、学識経験者などを交えた「容器・包装3R（リデュース・リユース・リサイクル）推進協議会」を発足、2003年10月からはレジ袋の受け取りを辞退した市民にポイントを還元する制度を設けていたが、辞退率は1割程度にとどまっていた。こうしたなかでの愛・地球博開催を受け、閉幕後には官民挙げて取り組みを強化。2007年10月から緑区内のスーパーなど24店舗で試行的にレジ袋の有料化を始めると、徐々に対象地域を拡大し、2009年4月には大都市として全国初となる、市内全域でのレジ袋有料化に踏み切った。

同市の推計によると、レジ袋有料化の効果は2013年3月までに削減されたレジ袋が14億8,068万枚。200リットルのドラム缶入り石油に換算すると、約96,000本分になる。レジ袋有料化による収益金は市内の環境保全活動などに充てられている。

同市ではレジ袋以外の容器包装削減の取り組みとしてマイボトル・マイカップ普及事業を展開している。2012年9月にはペットボトルの削減につなげようと、市が市内のスーパーに無料給水所を設置した

こともあった。2014年度は「マイバッグ持つあなたにマイボトル!」をキャッチコピーにして、店舗での販売促進やマイボトル・マイカップ対応の飲料サービス実施店をウェブサイトなどで紹介した。同年4月からは「レジ袋削減協定締結店」のマークを作成し、店舗に掲示した。リユースカップ事業ではリターナブル食器の貸し出しを無料で行い、2013年度は15回のイベントでリユース食器を約14,000個貸し出した。

また、粗大ごみとして回収した家具類を修理・展示販売。2013年度は314点を販売した。このほか、フリーマーケットへの助成などを行い、ごみ削減に取り組んでいる。

名古屋・マイバッグ促進マーク

岡崎の岩竹さん考案

名古屋はレジ袋の有料化の協力店舗を増やし、市民にマイバッグの利用を促そうと、「レジ袋削減協定締結店」のマークを決めた。

デザインを考案したのは岡崎市の岩竹優花さん(三〇)。マークには「マイバッグを愛用し示す。」

自然を愛そうとの気持を込めた。四月から協力店舗の店頭に掲示する。

NO!!レジ袋

環境・包装3R推進協議会・名古屋市

2014年3月2日中日新聞掲載



新たな社会を動かすエンジン

着々と再整備される会場跡地

博覧会場跡地は長久手会場の約190ヘクタールが愛・地球博記念公園（モリコロパーク）として2006年7月に第1期エリア、2007年3月に第2期エリアがオープンした。2008年には「グローバルループ」の一部も再度お目見えし、「サツキとメイの家」などの人気施設とともに、博覧会当時を懐かしむ人と新たな魅力にひかれる人でにぎわっている。公園運営は「市民参加」の精神を引き継ぎ、NPOや市民団体を中心に組織された「公園マネジメント会議」が担当。市民主導で利用方針などが話し合われている。公園の北入口には2010年に「地球市民交流センター」がオープンした。公園利用と管理運営の拠点として整備され、交流と環境をテーマに博覧会の理念継承、発展の場となっている。

屋内広場を取り囲むように体験学習施設や多目的室が配されるセンター本体は、丘陵地形に合わせたなだらかな曲面の大屋根が緑で覆われ、使用電力は太陽光や風力発電でまかない、自然換気やドライミストなどの導入で環境負荷を低減。冷房には地中の冷えた空気を利用する「クールチューブ」、暖房には間伐材を燃料にした暖炉を使う。ドーム型の体育館も付属している。2013年6月には田畑のある実験施設「あいちサトラボ」がオープンした。市民が交流を深めながら里山づくりや環境活動に取り組める施設である。また、向かいの大芝生広場の改修作業や老朽化したグローバルループの修繕工事が進められており、同工事終了後には2015年9月12日から11月8日まで「全国都市緑化あいちフェア」が開催された。これに合わせて恒久施設



閉館から10年がたっても、愛知万博の記憶はさきめきを失わない。万博会場だった愛知県長久手市の愛・地球博記念公園（モリコロパーク）の「サツキとメイの家」や、世界各国から訪れた人々を運んだリニアモーターカーの路線「リニモ」は、今も健在。楽しみながら思い出をたどる旅へ出てみませんか？



日本初の磁気浮上式リニアモーターカー「リニモ」。愛知県長久手市で。

リニモ 今も唯一無二

万博閉館直前に閉業し、「動くパビリオン」といわれたリニモ（東部丘陵線）。磁気浮上式リニアモーターカーの営業路線は、今でも日本でここだけだ。藤が丘（名古屋市）―八草（愛知県豊田）間の全線8.9%を貸し切り列車に乗りながらその性能を体感する「貸し切りリニモ」が人気を広げている。「磁石の反発する力とくっつく力、どちらを使って浮いているか、ご存じですか？」はい。多くの方が間違え

ますが、くっつく力でございます。加速しても、車輪のないリニモは至って静か。添乗員がマイクで繰り返される軽妙なトークもはっきり聞き取れる。30分走り、途中駅では浮上、着地を繰り返すデモンストレーションも体験できる。県外のツアー客の間で貸し切りリニモの知名度が上がり、2014年度は前年の倍の300本を運行。愛知高速交通の幹部は「未来が感じられる最先端の列車は、まさに万博の良き遺産」と話す。104人まで乗車可能で、3万8480円。奥岡社企画営業グループ＝電話0561(61)4781

「あの家」やっぱり人気

アニメ映画「となりのトトロ」の主人公たちの家を再現した「サツキとメイの家」。人気は衰えず、2013年度は約12万7000人が訪れた。今も、土日祝日はほぼ毎日、入場券が完売する。劇中では嫁娘中だったお母さんが元気になり、お父さんと娘のサツキ、メイの4人が暮らす「映画から1年後」の設定。昭和30年代の民家を細部まで再現込んだリアルさは好評だ。触って楽しめる展示のため、サツキのランドセルの中の教科書が汚れたり、障子が破れたり。スタッフが丁寧に直し、清潔な姿を保つ。「心を込めて仕事をし、未永く強したい。みんなの夢の場所だから」とガイドの安達誠

サツキとメイの家で記念撮影する入場者。愛知県長久手市で。



さん(42)。30分ごとの入れ替え制。春休みなど長期休暇中のぞき、月曜休館。高校生以上が510円、4歳から中学生が250円。予約券はローン、ミニストップの端末「Loppi」で、当日券は現地です。午前8時半から販売する。豊モリコロパーク＝電話0561(64)1130

i-unit 乗れるよ

トヨタグループ館のショーで、7色の光を放ちながら自由自在に舞台を動き回った「i-unit（アイユニット）」は今も、トヨタ会館（愛知県豊田市）に展示されている。いすの形をしていたりと思えば、ボタン一つで高速モードのレーシングカースタイルに变身。まさに近未来のパーソナルモビリティだ。今は動かしていないが「1日平均80人くらゐが乗って、記念撮影する」と担当者。豊トヨタ会館＝電話0565(29)3345



i-unitに乗って記念撮影する子どもたち。愛知県豊田市のトヨタ会館で。

情熱の国思い起こす

愛知県瀬戸市西市場のヨシヅヤ瀬戸店には、スペイン館外壁に使われていた六角形の色彩やかなブロック200個が展示されている。閉館後、ブロックを購入したヨシヅヤが一市町村一団フロンティア事業で同国と旧瀬戸町（現瀬戸市）が交流した縁で飾った。店の中央部にあり、ブロックでつくった半徑2.5mのアーチの下をくぐる。竹中秀二店長(51)は「アーチの下を好んで通るお客さまは多い。万博を思い起こす場所になっている」と話す。



全長12.4mのカモンハウスの巨大模型。愛知県豊田市のトヨタ会館で。

でっかい驚き 新鮮なまま

滑り台のような大きなくちばしと、滑り台のような大きなオーストラリア館で人気を集めた、全長12.4mのカモンハウスの巨大模型だ。津市白塚町の私設博物館「樋口友好ミュージアム」ではこの模型をはじめ、約200点の万博関連の展示物を集める。ミュージアムは近くに住む徳科医師、樋口良三さん(59)が運営。オーストラリア館ゆかりの資料を集めた新館「カモンハウス」は1月にオープンし、カモンハウスの模型のほか、オーストラリアの鉱物や羊毛など約40点を展示している。旧館の「ブタハウス」ではブータン館とラオス館の展示物を

紹介し、ブータンの仏堂「ナムゲ・カンザン」や、ラオスの民族衣装など約150点を見ることが出来る。「子どものころから外国の文化に触れるのが好きだった」という樋口さん。ブータン館とラオス館の展示物を買い取り、2006年にミュージアムを設立した。オーストラリア館ゆかりの資料は、13年に閉館した「オーストラリア記念館」（三重県四日市市）から譲り受けた。開館時間は毎週日曜の午前10時～正午。入館料は一般300円、小中高生200円。樋口良三＝電話059(232)3075



店内に飾られているオーストラリア館の外壁の六角形のブロック。愛知県瀬戸市西市場のヨシヅヤ瀬戸店で。

残った種 巡り歩こう



愛・地球博を契機とした 名古屋城本丸御殿復元工事



第1期工事を終え、観覧できるようになった名古屋城本丸御殿の玄関・表書院 (名古屋市提供)

名古屋城で進められている本丸御殿復元工事に対し、2005年日本国際博覧会協会は2007年3月30日、愛・地球博の理念を受け継ぐ事業であるとして、10億円を寄贈した。

名古屋城本丸御殿は1615（慶長20）年に天守閣の南側に完成。尾張徳川家初代藩主・義直の住居や藩の政庁として使われていたが、義直が住まいを二之丸御殿に移してからは将軍上洛時の宿泊場所となった。1634（寛永11）年に、3代将軍家光の上洛に合わせて、増築された。

総面積約3,100平方メートル、30以上の部屋がある書院造の平屋建てで、近世城郭建築の最高傑作と言われ、1930年に城郭として国宝第1号に指定されたが、1945年5月の空襲で天守閣とともに焼失していた。愛・地球博開催中の2005年3月～6月には名古屋城で「新世紀・名古屋城博」が

関連イベントとして開催され、本丸御殿の障壁画復元模写が展示された。

市民の間でも本丸御殿の復元を求める活動が高まりを見せ、名古屋市では、名古屋城の魅力を一層向上させ、匠文化の後世への継承を図り、交流のあるまちづくりを進めるうえで核となる一大文化事業として、2009年に本丸御殿の復元工事に着手した。

焼失を免れた文献や実測図、古写真など豊富な資料をもとに、原則として旧来の材料と工法により復元を進めている。3期にわたる工事の様子は公開され、焼失した狩野派の障壁画の復元模写も進めている。2013年度には「玄関・表書院」が完成し、公開している。その後、2016年度には「対面所」などが、2017年度には「上洛殿」などが完成して復元工事が完了し、2018年度には全体公開する予定である。



ケネディ米大使
名古屋城など見学
愛知県初訪問

来月で着任して一周年を迎えるキャロライン・ケネディ駐日米大使が九日、初めて愛知県を訪問し、名古屋市内の徳川美術館や名古屋城を見学したほか、米国とゆかりのある経済人らと意見交換した。

芸術家の夫シユロスバーグ氏とともに、まずは徳川美術館に立ち寄った。江戸時代後期に描かれた大和絵を鑑

賞した後、名古屋城へ移動。大村秀章知事と河村たかし市長が出迎えた。写真。ケネディ大使は、知事らとこやかに言葉を交わすと、本丸御殿へ。

河村市長によると、当時の日本を代表する狩野派の絵師らによって描かれた豪華な障壁画が、戦災によって焼失し復元中だということを知っていたケネディ大使は「オリジナルの方が断然良いですね」と残念がっていたという。

河村市長は、記者団に「(来年三月の)名古屋ウィメンズマラソンのスターターをお願いした。ぜひまた名古屋に来てもらいたい」と話した。

ケネディ大使は、ジョン・F・ケネディ元大統領の長女。ハーバード大で美術を専攻し、米メトロポリタン美術館での勤務経験もあるなど、芸術に造詣が深い。

2014年10月10日中日新聞掲載



公開に向け工事が進む対面所(左奥)など名古屋城本丸御殿



2015年3月に公開された本丸御殿の「表書院一之間」



多彩な色にライトアップされた本丸御殿



モリコロは引っ張りだこ

博覧会のシンボルとして会場内外で大活躍したキャラクター「モリゾーとキッコロ」。愛・地球博の認知度を高めるという大きな役割を終え、博覧会閉幕後は会場近くの海上の森に帰り、ひっそりと暮らしていることになっていた。ところがその後も「モリコロに会いたい」という市民の声は根強く「イベントに出てほしい」との引き合いが絶えなかった。これを受けて閉幕から2カ月後の2005年11月、博覧会協会はモリコロの活動再開を決めた。

着ぐるみのモリコロは再び街に繰り出し、博覧会の理念を市民に思い出させた。キャラクターグッズも2006年3月に販売を再開。名古屋市内の百貨店では新グッズを求めるファンで行列ができるほどだった。NHKはEテレで、着ぐるみのモリコロが子どもたちと自然体験をする教養番組「モリゾー・キッコロ森へいこうよ!」を放送。モリコロ人気はあらためて全国区になり、日本全国からイベントなどへの出演依頼が来るようになった。

2008年にはスペインへの“海外出張”も果たし、サラゴサ万博で現地マスコット「フルービー」と共演、愛知の理念を世界にアピールした。同年夏の北海

道洞爺湖サミットでは地球温暖化防止を啓発する「クールアースアンバサダー」に、キャラクターとしては唯一、有識者と並んで就任した。

その後も、2012年1月には、歌手のSMAP草彥剛さんらとともに、麗水博日本館のPRサポーターに任命され大活躍であった。さらに2013年12月には歌手のきゃりーぱみゅぱみゅさんらとともに、ミラノ博日本館のPRサポーターに任命されて、2015年5月から開催されたミラノ博で活躍した。

また、2014年3月には、2015年9月から11月まで愛知県の愛・地球博記念公園を中心に開催された第32回全国都市緑化あいちフェアの「緑化特別大使」に任命され、活躍した。

なお、2015年3月に開催された愛・地球博開幕10周年記念式典・催事への出演に合わせて、着ぐるみを新調した。その後、ミラノ博において、7月の「ジャパンデー」や8月のGISPRI催事等のイベントに出演した。

(モリゾー・キッコロの使用許諾等を行っているモリコロライセンスセンターについては20ページを参照)



2015年3月28日の愛・地球博開幕10周年記念催事に出演したモリゾー・キッコロとカラーキッコロたち



広がるボランティアと市民参加

博覧会期間中、来場者の案内やゴミの分別、環境学習などに励んだボランティアたちは、閉幕後も交流を深めて活動の輪を広げている。2006年8月には法人格を取得し「特定非営利活動法人愛・地球博ボランティアセンター」として再出発。「市民参加型社会の実現」という博覧会の理念を継承し、ボランティア活動の場を提供する事業などを始めた。

愛・地球博記念公園（モリコロパーク）のガイドや周辺の清掃活動、EXPOエコマナーセンターの運営などのほか各種講座やセミナー、フォーラムなどに参画。2007年12月には「第11回IAVEアジア太平洋地域ボランティア会議」を名古屋市などで開き、16カ国・地域から約500人を招いてさまざまな分野からボランティアの現状や課題について討議、ボランティア同士の交流を深めた。2009年11月22日には「Make a CHANGE Day」を初開催。

アメリカで続いている「Make a difference day」をモデルに、全国各地で年に1日、一斉にボランティアや市民活動を行うことを呼び掛けた。

また上海万博などへボランティアを派遣したほか、愛知県内で開催される各種催しにボランティアとして参加。愛・地球博記念公園周辺道路での清掃作業「やろまいか! 愛・地クリーンアップ!!」や「モリゾー・キッコロおもちゃ病院」など、さまざまな活動を続けている。

同センターでは、愛・地球博開催前に実施した約3万人のボランティア研修のノウハウなどを生かし、センターの理事・職員・会員によるボランティアや市民活動に関する研修会や講座への講師派遣も行っている。

また国際博では初の本格的な取り組みとして賞賛された「市民参加」の実践は、その後も時と場を移して新たに試行が続けられている。



IAVEでのワークショップの様子



IAVEでの参加者の交流



Make a CHANGE Dayの参加団体による活動の様子



横浜開国博Y150のヒルサイドエリア会場。「市民創発」をテーマにさまざまな取り組みが展開された=2009年7月、横浜市旭区で

横浜市の開港150年を記念して2009年に開かれた「開国博Y150」。来場者は単に展示を見るだけでなく、竹トンボや押し花、割り箸の炭づくりからテレビ番組の制作、盆踊りや草笛演奏、農作業、丸太切り、そしてゴミ拾いまでも自ら楽しみ、会場は活気にあふれていた。愛知で「市民参加」を試行錯誤したスタッフらが新たに「市民創発」というコンセプトを生み出し、徹底的な参加型のプログラムづくりを呼び掛けたからだ。



フレンドシップで続く草の根交流

愛知県内の市町村が博覧会の公式参加国とパートナーシップを組み、来日した関係者と草の根交流をした「一市町村一国フレンドシップ事業」は博覧会閉幕後、それぞれの地域で継承、発展されている。

相手国との交流を続けている自治体では、その国からの留学生を定期的に招いたり、逆に中高生を相手国に派遣し、同世代の子どもたちとの交流から発展途上国の厳しい現状を理解させたりもしている。なかには姉妹都市提携をも目標に相手国の都市と交流を重ねた自治体もあり、碧南市はクロアチア共和国のプーラ市と、東海市はトルコ共和国のブルア県と、ともに2007年に姉妹都市提携の締結に至った。

愛知県は2007年度に「フレンドシップ継承交付金」制度を創設。2012年までの5年間、申請のあった市町村の継承事業に交付金を配分した。2009年10月には愛・地球博記念公園（モリコロパーク）



笑顔の傘 平和な空に モリコロパークで催し

ステージには1期から参加の市町村の旗が掲げられていた

（愛知万博から10年）

2015年9月26日中日新聞掲載

で「あいちワールド・フレンドシップ・フェスタ」を開催し、交流を続ける各自治体が35カ国の文化をブースやステージで紹介した。

このほか、フレンドシップの21カ国から招いた映画監督とカメラマンが相手先の市や町の風景などを撮影、編集した記録映画を博覧会場で上映した「フレンドシップフィルムフェスティバル」をきっかけに続いている交流もある。

また県は、2012年度に「あいち国際戦略プラン」を策定し、「一市町村一国フレンドシップ継承事業」の成果も活用した地域での国際交流・国際協力活動を推進している。地域による草の根交流は、県民主体の国際化を促すとともに、地域の国際的な魅力を発信することにつながる。愛知県は外国人登録数が全国3位（2012年・法務省）であり、「一市町村一国フレンドシップ事業」により高まった県民の国際交流や異文化理解への関心を原動力の一つとして、さらなる国際化を進めている。

2015年9月～11月に愛・地球博記念公園で開催された「第32回全国都市緑化あいちフェア」では、愛・地球博10周年記念イベントとして9月12～27日に「一市町村一国フレンドシップフェスタ」を開いた。市町村が相手国から寄贈を受けた記念物品の展示のほか交流の歩みを紹介。世界各国の料理や民芸品などの販売も行い、草の根の国際交流の成果と継承をアピールした。

世界との縁、今も

愛知万博から10年 第2部 神田真秋前知事

愛知万博では「一市町村が生まれきつかけの一市町村フレンドシップ」ついで、私が2000年のこの事業があった。文・ドイッ・バー・パー万博字通り、開幕前から県内を訪れたときの経験が八十六市町村（当時）だった。そこで足のは、会場が、それぞれ万博参加国。そこで足のは、会場が、ホームシティ、タウ、内の小さな舞台で、各自治体として、さまざまな交流が催し、各自治体のパフ、演や支援を促すという、オーマースだった。その、万博の会期中、中には、わが国から日本は、参加国とのナショナル、舞踊の踊り手たちも参加、ナショナル、という日があっていたが、見ている、り、そこに相手の市町村は関係者の姿がちらほら加わることもあった。あるだけ、実に寂しい光、この万博史上初の試み、舞だった。

① 1市町村 1国事業

現地には詳しく日本政府、ヨナルデーの業者は芳し、関係者に聞くと、「ナシくない。ただ、企業や自、と何らかの縁がある国は、盛りに上がっている」と言、どなたが合言葉で、う。

「このことば、愛知、母国の国歌が聴けた、万博が始まるまでに、各、と涙ぐんでいた。人、国との絆を語っておけば、正直言って、人の集、はそう考え、フレンド、は頭の痛い問題だった。ツブ事業を思い立った、だが、このフレンドシ、ップ事業は見事な成功例と、なりました。愛知万博が閉、を閉じ、パートナーを、舞う、さまざまな、参加国を運んでくる、万博で生まれた、愛知、列谷市とカナダ、細、国際事務局、BIEの口、沢市とギリシア、セルテレス事務局員ら、もともと姉妹都市提携、掛けられた言葉だ、は、繊維やファッション、その営業通り、瀬市、西市、金時とイタリア、がサフロンの支那のあ、との交流があった。尾、その営業通り、瀬市、という兵遣いがあった、に舞をしたり、シンカ、担いは万博の本番で、ホルの小学生が愛知町、中した、ナショナルデー、でホームステイをする、では、「ホーム」とな、ど、万博で生まれた交、た市町村が多くな、は今も各地で続い、が詰めかけ、その国、る。

2015年7月14日中日新聞掲載



進む国際化と「もてなし」意識

博覧会と中部国際空港（セントレア）の開港をきっかけに、東海や中部地方には世界から多くの観光客が訪れるようになった。地元では「万博特需」をきっかけに観光振興に力が注がれ、外国人観光客に対する「もてなし」が一層意識されるようになっていく。

愛知県ではそれまで50～70万人程度だった外国人宿泊者数が2005年には約85万人と急増。その後も80万人台を維持し、2008年には90万人を突破した。県は2007年に外客来訪促進計画を改定し案内所の整備や海外での積極的なキャンペーンに乗り出し、2013年の外国人宿泊者は延べ114万7,560人だった。

地域の国際化も一気に進み、名古屋市交通局は博覧会期間中の2005年4月下旬から市営地下鉄東山1号線で始めた日、英、韓、中国、ポルトガルの5カ国語による車内放送を継続。名古屋駅や藤が丘駅に降り立つ外国人客はもちろん、地元の市民にもすっかり定着した。2006年10月からは名城線の環状化にともない全路線で駅名表示や案内表示を多言語表示に切り替えたほか、5カ国語による路線図や乗車券の購入方法を記したパンフレットなども随時発行、配布している。

2013年9月、東京五輪・パラリンピック招致を決めた国際オリンピック委員会（IOC）総会で、東京五輪・パラリンピック招致アンバサダーの女性ニュースキャスターが発言した「お・も・て・な・し」は、多くの人に強烈な印象を与え、同年の新語・流行語大賞に選ばれた。



中部地方の玄関、中部国際空港（セントレア）

「おもてなし」の根底にあるのは相手を慮り、見返りを求めず、敬意、丁寧に接する精神といえる。愛知県内への外国からの観光客が増える中、「おもてなし」の心はより一層、県民の中で深まりを見せ、多くの観光客を魅了している。

中部国際空港では訪日外国人が空港到着直後から手ぶらで観光を楽しめるようにと2014年に、空港から宿泊先のホテルなどに当日中に手荷物を届けるサービスを始めた。また、同年に名古屋市で開かれた「持続可能な開発のための教育（ESD）に関するユネスコ世界会議」では、愛知県立大学外国語学部の学生による外国人に向けて愛知県や名古屋市を紹介する英語の冊子を作り、会場などに置いた。

政府は2020年の東京五輪・パラリンピックが開催される2020年までに訪日外国人を4,000万人に増やす目標を掲げており、愛知県は2015年を「あいち観光元年」として、2016～2020年のアクションプランをつくり、それに基づいて観光プロジェクトに取り組むことを宣言した。2015年には受け入れ環境の充実のために市町村観光協会などを対象に、多言語表示の観光案内板整備への補助金制度を創設した。



各国語で表記された地下鉄マップ



COP10・ESDユネスコ世界会議の開催

COP10の開催は日本政府と愛知県、名古屋市が博覧会の理念継承の機会と位置づけ、官民挙げて強く誘致を進めてきた。生物多様性条約は1992年の国連会議で正式に採択された国際条約で、環境問題の世界的なキーワードとなっている。世界では年間4万種の生物が絶滅に追い込まれているとされており、これを食い止めるとともに生物資源から得られる経済的利益を先進国と途上国間で平等に配分するための枠組みづくりが急務となっている。

博覧会開催の成果をアピールした愛知県、名古屋市は2008年5月、COP10の誘致に成功。2010年10月、名古屋市の名古屋国際会議場をメイン会場に開催。遺伝資源（医薬品や食品の開発につながる動植物や微生物）へのアクセスと利益配分の国際ルールとなる「名古屋議定書」と、人類と自然の共生を目指す長短期の世界共通目標である「愛知ターゲット」を採択した。また、名古屋市と愛知県が関連会議として開催した「生物多様性国際自治体会議」では、生物多様性を保全するために自治体が積極的に行動を起こすことなどを盛り込んだ「愛知・名古屋宣言」を採択した。関連事業会場として愛・地球博記念公園（モリコロパーク）も活用され、子どもたちによるコナラの木の植樹、千人太鼓、水生生物に触れられるコーナーなどがあった。

COP10の開催を機に名古屋市は2011年9月、名古屋の身近な自然の調査・保

全活動を推進する「なごや生物多様性センター」を同市天白区元八事に開設。生き物に関する情報収集・発信、調査・保全活動、ネットワークづくりに取り組んでいる。

また、2014年11月10日から3日間、名古屋市熱田区の名古屋国際会議場などで、持続可能な開発のための教育（ESD）に関するユネスコ世界会議が開かれ、ESDの重要性と促進を訴える「あいち・なごや宣言」を全会一致で採択した。

3日間の会議では、国連が「ESDの10年」と位置づけた2005年から2014年までの活動と今後の課題が議論された。「あいち・なごや宣言」は、気候変動や生物多様性の保持、防災など世界的な課題に対し、すべての国がESDを促進する必要性を強調。優れた事例に奨励金を与える「ユネスコ日本ESD賞」の創設を定めた。

これを受けて、2014年12月の第69回国連総会において、国連ESD活動10年の後継プログラム「グローバル・アクション・プログラム（GAP）」の開始が正式に承認された。

名古屋議定書を採択

COP10閉幕
地球 生きものの名護

生物資源の利益配分 愛知ターゲットも合意

生物多様性条約の締結国は192カ国に達し、締結国は生物多様性の保全と持続可能な開発の両立を目指す。名古屋議定書は、遺伝資源のアクセスと利益配分の国際ルールを定める。また、愛知ターゲットも合意された。

COP10での主要結果	
最終目標 2020年まで	生物多様性の保全と持続可能な開発の両立を目指す。名古屋議定書は、遺伝資源のアクセスと利益配分の国際ルールを定める。
主要目標	生物多様性の保全と持続可能な開発の両立を目指す。名古屋議定書は、遺伝資源のアクセスと利益配分の国際ルールを定める。
副目標	生物多様性の保全と持続可能な開発の両立を目指す。名古屋議定書は、遺伝資源のアクセスと利益配分の国際ルールを定める。
名古屋議定書	遺伝資源のアクセスと利益配分の国際ルールを定める。
愛知ターゲット	生物多様性の保全と持続可能な開発の両立を目指す。
名古屋議定書の採択	遺伝資源のアクセスと利益配分の国際ルールを定める。
名古屋議定書の採択	遺伝資源のアクセスと利益配分の国際ルールを定める。

閉会全体会で、壇上から旗断帯を手にESDの推進を訴える小中学生たち。12日午後、名古屋市熱田区の名古屋国際会議場で（現地巧輝撮影）

地球の未来 目を向けて
あいち・なごや宣言 採択し閉幕

2014年11月13日中日新聞掲載

2010年10月30日中日新聞掲載



Interview

インタビュー集



万博の“鉄則”は「驚き」と「楽しみ」

「自然の叡智（えいち）」をテーマに自然との共生をうたった愛・地球博から5年後の2010年には、中国・上海で上海国際博覧会（上海万博）が開かれました。その2年前に行われた北京五輪と同様に規模の大きさは中国ならではの、会場の広さは愛・地球博の約2倍。参加した国や国際機関の数は246に達しました。入場者数も過去最多だった大阪万博（1970年）の約6,400万人を上回る約7,300万人を数え、大成功でした。テーマは「Better City・Better Life（より良い都市・より良い生活）」でした。

開催の半年前に、北京で開かれた上海万博国際フォーラムにパネリストとして招かれ、「万博は持続可能な発展ビジョンを共有化する重要なきっかけ」と題してスピーチしました。よく、理念の継承ということが言われるのですが、われわれが愛・地球博でやったことは参考にはなっているでしょうが、それは理念をそのまま継承するということとは少しニュアンスが違います。国際博（万博）を開催する国にはそれぞれ国情があり、世界に何を訴え、何を示し、理解してもらうのかについて、上海は上海で独自の課題を挙げたのです。世界の半分の人口が都市に暮らしていることを背景にしたテーマですが、都市の発展という普遍的な問題に対して、世界中の人が自分たちがどのように解決していくかについて知恵を結集し、アイデアを交換しました。

万博はクリエイティブなもので時代や地域によって内容が異なってくるのが当然で、そうでなければ単なる見本市になってしまいます。中国自体が、経済的に著しい成長を遂げ、今や世界の経済大国として都市化が急速に進んでいることを考えて、上海は新しいチャレンジをしたということです。敬意を表したいですね。発展に伴い、地方と都市の格差や都市部でも貧富の格差などが指摘されるようになり、まさに「より良い都市とは」「より良い生活とは」の問題は切実で、国情を象徴したテーマだったと思います。

開催期間中にも何度か上海に行きました。セミナーへの参加要請があって紹興酒で有名な紹興市にまで足を伸ばしました。私も講演し、また周辺の発展した村や市の

首長さんの話を興味深く聞かせていただきました。行くたびに感じたのは電車に乗る人のマナーが向上していたことです。とかく列を乱し、押し合いへし合いになると評判の悪かった乗り方が改善していたようでした。これも万博の小さな効能でしょうか。

万博について、私が“鉄則”だと思っているのは「驚き」と「楽しみ」です。いろんな考え方をもち、いろんな議論があって、しっかりした問題提起をして、パビリオンで表現する。それを見た人たちが理解する。そして、そこには見る人の驚きと楽しみがある。万博とはそういうものではないでしょうか。最先端の技術を駆使することや愛・地球博での冷凍マンモスの展示などは万博の本質に添ったものだと思います。参加する国々は、お国柄を反映させていました。ドイツはモノ作りの原理を模型を使ってわかりやすく見せ、フランスはデザイン性が豊かでした。発展途上国にもそれぞれ特徴が表れます。どこの国のパビリオンとは言いませんが、お堅い説明文が大部分で「楽しさ」とは正反対のものにもお目にかかりました。

昨年5月から10月まで、イタリアのミラノでミラノ国際博覧会が開かれました。テーマは「Feeding the Planet, Energy for Life（地球に食料を、生命にエネルギーを）」で、「食」は人類にとって普遍的な問題で、いろんな取り上げ方ができます。飢餓、飽食、肥満、乱獲、枯渇化、食文化…。日本館の出展コンセプトは、持続可能な食の共生社会に貢献する知恵と技。二度ほど訪れましたが日本の食に関わる繊細な文化がきめ細かく展示されていました。多様性も含めて十分にアピールできていたと思います。多くの自治体がそれぞれに工夫を持ち込み、参加型の万博になっていたのも好感を得ました。現地メディアが「詩情と科学技術のバランスが絶妙」「行列嫌いのイタリア人を並ばせた」と日本館を評価したのもうれしいことでした。米国、カナダ、オーストラリアといった食料輸出の多い国も、それぞれにテーマを追求した工夫が見られました。そして、愛・地球博から続く理念の継承という姿勢も感じることができました。





生物多様性のための技術に期待

愛・地球博からもう10年…。愛知では会場設計を担当し、「ループ」を提案させてもらいました。敷地面積が狭く、しかも高低差が50メートル。万博終幕後は元に戻すから大きな造成もできない。制約の多い厳しい条件のもとで、初めて来ていただく人たちに安全に分かりやすく会場を巡ってもらう方法として考えたのが、一番高いところに合わせてフラットな面をつくり、だんだん低いところへ降りていく「空中回廊（ループ）」です。メインルートを一筆書きで回る感覚とでも言えばいいでしょうか。

万博は先端技術を駆使して、未来都市の都市の最初のモノ、技術を見せる側面があります。1967年のカナダ・モントリオール万博でのアメリカ館「ジオデシック・ドーム」のドーム建築などもその一つで、その後、インスパイアされて現在に至っています。その意味で「ループ」は、万博が生んだ技術であり、「未来体験や非日常体験」の演出に大きな役割を果たしたと思っています。2010年の上海万博でも、ループのコンセプトがあちらこちらに見え、考え方が引き継がれているのを感じました。

発想の源は、私が師事した菊竹清訓先生が黒川紀章氏らと提唱された「メタボリズム」にあります。社会の変化や人口の増加に伴い、建築都市の新陳代謝、循環更新システムによる建築の創造を図ろうとしたものです。菊竹先生の下でハワイ海上都市や沖縄海洋博（1975年）の政府館アクアポリスの設計に携わりました。そうした活動の中で、地球環境全体、あるいはエコ（生態学、環境問題対策）を考えたとき、「建築（物）が地表面積を覆いすぎているのではないか。もっと立体的に利用すべきではないか」と人工地盤システムへの思いを強くしていったわけです。

もともと自然には水脈や空気の流れ、海と山との一体の関連などネットワークがあるのに、それを人間が力で抑えようとして分断させてしまった。時計の針を元に戻すのは無理ですが、先端技術でもとの自然に近づけていこうとする考え方は必要だと思うのです。ベトナムのトンキン湾北西部に、海中から尖塔（せんとう）のような岩が突き出し、彫刻作品のような景観を誇る世界遺産があります。中国の名勝になぞらえて「海の桂林」とも呼ばれます。そ

の湾内の観光拠点になっているカットバ島をループのコンセプトも採り入れながらエコアイランドにすべく計画しています。もちろん、未来都市のモデルを見せ、実現していく万博の精神があるのは言うまでもないことです。

ミラノ万博のテーマは「地球に食料を、生命にエネルギーを」でした。まさに自然のネットワークに通じるところがあり、多くの生物多様性のための科学技術の提示がありました。「食」の重要性は今後、ますます議論されるでしょう。

というのも、昨年、国連が発表した世界の人口推計によると、2015年には約73億人だったものが2050年には約97億人に増えるということです。飢えをどうやって克服するのはとても大事な問題です。と同時に、それは私の専門の建築—「住」の問題でもあります。例えば、日本とアフリカなどの発展途上国では住み方が全然違う。さまざま異なる条件の下で、どう快適に住むのか。ただ、今の段階で必ずしも都市の将来ビジョンができていないとは言えず、価値観の大転換が必要だと思っています。





「食の共生社会」に貢献を

愛・地球博から10年が過ぎ、昨年はミラノ万博が開催されました。私は、ミラノでの日本政府出展事業総合プロデューサーを仰せつかり、忙しい毎日を送らせてもらいました。半年間にわたって行われた一大イベントの閉幕前、専門審査員による審査で「日本館」が展示デザイン部門において金賞（銀賞韓国、銅賞ロシア）を受賞し、大役の一端を担えたのかなと安堵（あんど）しました。

ところで、みなさんは「ESD」をご存じでしょうか。ESDとはEducation for Sustainable Development（持続可能な開発のための教育）に関する世界共通略語で、人類が直面するさまざまな課題を解決し、持続可能な社会を築くための人づくりのことです。対象となるのは環境・防災・気候変動・生物多様性・国際理解・歴史文化・生産と消費・ジェンダー平等などで、学校教育はもちろん社会教育や生涯教育、さらには企業の人材教育など多様なステークホルダーが主体となって推進する教育運動です。

2002年、国連によって開催されたヨハネスブルクサミットで、日本は持続可能な社会を実現するために世界中で人づくりに取り組むことを国連教育科学文化機関（ユネスコ）に提案しました。これを受けて2005年、ユネスコのプロジェクト「国連ESDの10年」がスタートするのですが、私が事業チーフプロデューサーを務めた愛・地球博がプロ

ジェクトのキックオフイベントに位置付けられたのでした。それがきっかけとなりESD推進のためにいろんなチャレンジをしています。2014年はプロジェクトの最終年にあたり、名古屋市でユネスコの公式会合「ESDに関するユネスコ世界会議」が開かれ、世界中がこの10年間を総括し、今後のESDの普及と発展のためにできることを話し合いました。愛・地球博では21世紀最初の万博として、地球的課題を解決するための新しい舞台を目指し、「持続可能な地球社会の構築への貢献」「地域・生物・文化の多様性の擁護」「地球市民としての連帯の促進」を掲げました。愛・地球博に関わった多くの教育者や市民参加プロジェクトのリーダーたちと協働し、市民主導によるESD推進のための官民協働による「対話と交流の場」づくりにも取り組んできました。

「地球に食料を、生命にエネルギーを」をテーマとするミラノ万博では、世界に対する日本の貢献を大いにアピールしようと意気込みました。健康でおいしく美しい日本の食文化の知恵と技や食品加工の知恵と技、また質の増産を極める食料生産の知恵と技。持続可能な「食の共生社会」に貢献する多用なアプローチができたと思います。日本各地30の道府県が参加して、毎週のようにどこかの自治体が懸命にPRし、世界遺産に登録された日本食への理解を深めたと確信しています。

ミラノはサロンの街として知られ、特に国際家具見本市「ミラノサローネ」は50年余の歴史をもっていますが、ミラノ万博では展示場を飛び出して、20日間にわたって市内各所で「ジャパンサローネ」とでもいうべき催し物を展開し、とても好評でした。そして、あらためて感じたのは、食料生産に関して持続可能な社会を維持できるのか、日本は何ができるのか、ということです。そのために自然環境を揺るがぬ土台にした健全な生命のピラミッドの維持と成長を訴えたい。それは今後の農政を日本人に問うことにもなると考えています。





牧村 真史 さん

万博は地球的な課題を体験する場

昨年開催されたミラノ万博には開催中に2度ほど足を運び、いろいろと見させてもらいました。全体的にとっても分かりやすい動線でした。直線のメインストリートの両サイドに、国旗を縦にデザインした各国のパビリオンが並び、いかにもヨーロッパの香りが漂っている、という印象でした。日本館の展示は細部にまでこまやかな神経が行き届いていて、良くできていたと思いました。また映像技術を使い、子どもたちに自然と触れ合ってもらおうという参加型の博覧会を体験させていたのもいいアイデアでした。映像によるコミュニケーションは今後もいろんなバリエーションが増えていくのではないのでしょうか。

ミラノ万博では直接的には関わられませんでした。2010年の上海万博では忙しく働かせていただきました。日本政府館の広報・催事総合プロデューサーとしての仕事に加え、愛・地球博での経験を買われて上海万博協会の海外運営顧問に就任したことで、開幕前には月に2、3度は日本との間を往復していましたから。いろんな場所でセミナーを開き、「そもそも万博とは何のためにするのか」といった基礎から話すことも多くありました。国としてのメリット、開催地・上海の都市開発促進や市民の文化意識の向上…。万博が、地球的な課題を世界の人々とともに解決する手法を提示し、体験する場なのだということ はしっかり理解してもらえたと思います。日本が東京オリンピック（1964年）と大阪万博（1970年）を経験して先進世界の仲間入りを宣言したのと同様に、中国は北京オリンピック（2008年）と上海万博をセットで考えていたのだと思います。

日本館の催事ではテーマに合わせて地方自治体や文化団体が30団体近くイベントに参加してくださり、半年間の会期中、満足のいくものが提示できたと胸を張れます。建築の領域では日本の循環型のエコ建築を前面に押し出しました。パビリオンの空調では、雨水を使う冷却機能や撥水（はっすい）機能、またミスト

（散霧）で熱量を下げるなど建築としての質の高さを示せたと思っています。愛知から受け継ぐ、自然の叡智（えいち）、環境問題への取り組み、持続可能な社会といったテーマは生きていました。もちろん、上海でもベースになる考え方に変わりはありませんでした。

そして、愛・地球博での特長の一つにボランティアの参加がありました。大きなイベントを行う際に、ボランティアのパワーは欠かせないもので「第3のエンジン」などと言われます。上海でも市政府と万博事務局が公募しました。学校や組織を通じて参加を呼びかけ、仕事の分担もしっかり行いましたが、本当の意味で万博を支えた愛知の市民やボランティアと比較すると「まだ緒に就いたばかりなのかな」という思いはぬぐえませんでした。それでも過去最大入場者を記録しスケールの大きかった上海万博は、これまで開催した国がそうであったように習慣や文化、歴史を反映したオリジナルでした。その時点での中国が示せる最高のものだったといえるでしょう。私は現在、公園や校庭、駅前広場といった公共空間を市民が使用できる場所に変える計画にさまざまな分野の専門家と一緒に取り組んでいます。それはそのまま持続可能な社会の創成につながると信じています。



Appendices

資料編

財団法人2005年日本国際博覧会協会による 理念継承発展事業一覧

タイトル	期 日	場 所
愛・地球博報告会	2005年12月21日 (アンコール開催2006年2月25日)	名古屋市民会館大ホール
開幕1周年記念交流懇談会 シンポジウム「市民で創る持続可能な社会」 EXPO2005交流の夕べ	2006年3月24日	ウェスティンナゴヤキャッスル
記録映像試写会	2006年5月25日 2006年6月5日	愛知県芸術劇場大ホール 東京国際フォーラム
育てよう! 愛・地球博の種 市民大交流フェスタ	2006年6月23日～25日	久屋大通公園、アスナルホール ほか

愛・地球博閉幕1周年記念イベント(2006年9月16日～25日)

愛・地球博が一過性のイベントではなく、開催地の人々の記憶に未永く刻まれていることや、その成果が具体的な継承活動として展開し始めていることを示し、博覧会の理念を更に継承・発展させるために博覧会協会主催により実施したイベント

タイトル	期 日	場 所
愛・地球博閉幕1周年記念シンポジウム	9月16日	東京国際フォーラムD7ホール
Friends of Love The Earth 2006	9月17日	名古屋国際会議場「センチュリーホール」
モリゾー&キッコロ クリーンアップ大作戦	9月18日	名古屋市内および豊田市内
愛・地球博開幕までの軌跡	9月19日～20日	愛知県厚生年金会館大ホール
愛・地球博「カイゼン」 ～その軌跡とメッセージ展	9月21日～25日	丸栄百貨店
モリゾー・キッコロミュージカル	9月22日～24日	名古屋市民会館大ホール
大津通ストリート・フェスタ 「地球の愛し方2006」	9月23日～24日	アスナルホール
大津通ストリート・フェスタ 「EXPOコミュニティCafe」	9月23日～24日	若宮大通公園・大須商店街内大津通沿い エリア各所
集結! 愛・地球博のロボットたち ～思い出のあのロボットたちに会いに行こう～	9月23日～25日	愛・地球博記念公園内 愛知国際児童年記念館
「地球子ども会議2006 for 上海」	9月24日	愛知大学豊橋校記念会館ホール
愛・地球博 大復活祭	9月24日～25日	名古屋国際会議場「センチュリーホール」
愛・地球博閉幕1周年記念式典	9月25日	名古屋国際会議場「センチュリーホール」
愛・地球博 MEMORIAL FINAL	9月25日	久屋大通公園久屋広場

愛・地球博閉幕1周年記念イベントで博覧会協会が協賛したメディア&自治体主催イベント

タイトル	期 日	主 催
読売ジュニア特派員による 愛・地球博閉幕1周年記念新聞発行	9月16日～25日	読売新聞中部支社
環境デーなごや2006 中央行事	9月17日	名古屋市
荒川静香とモリゾー&キッコロの EXPOオン・アイス	9月21日	東海テレビ放送／中日新聞社
よみがえる笑顔と感動展	9月21日～25日	読売新聞中部支社
「あいち海上の森センター」開館記念事業： 全国森づくり・里山再生フォーラム in 愛知	9月22日～24日	全国森林組合連合会／愛知県
愛・地球博 Message LIVE	9月23日～24日	中部日本放送／中日新聞社
名城カウントダウン2010	9月23日～24日	中日新聞社／東海テレビ放送／東海ラジオ 放送／名古屋タイムズ社／名古屋市
大津通ストリート・フェスタ 「甦れ！愛・地球博の熱き想い」	9月23日～24日	名古屋テレビ放送
愛・地球フェスティバル2006	9月23日	東海テレビ放送
おもてなしボランティア記念講演会 in せと ～まるっとミュージアム「出会いと感動をその次へ」～	9月23日	せと・まるっとミュージアム推進会議
Expo Memorial Concert 青春のグラフィティコンサート Vol.7	9月24日	中部日本放送／中日新聞社
おかあさんといっしょ 「ぐーちょろランタンがやってきた」	9月24日	NHK中部ブレイズ
ボランティアふれ愛フェスティバル in もちの木広場	9月24日	愛知県
第16回全国ボランティアフェスティバルあいち・なごや プレフェスティバル	9月24日	同フェスティバル実行委員会
愛・地球博閉幕1周年記念茶会	9月25日	東海テレビ放送

2007年度助成事業

1 『シニアの環境問題への取り組み活動』促進啓発事業

高齢社会NGO連携協議会（東京都）

高齢化社会に対応するため各分野のNGO、NPOが連携して設立された同協議会が、環境問題の国際的なオピニオンリーダーらを招いて国際シンポジウムを開催。シニアの環境問題への取り組みについて討議し、長寿社会における役割について意見交換した。

2 森の健康診断全国WEB-GIS作業

矢作川水系森林ボランティア協議会（愛知県）

長野、岐阜、愛知の各県を流れる矢作川の流域で活動する森林ボランティアらでつくる同協議会が、2004年から毎年行っている「森の健康診断」で収集された膨大な森林データを幅広く共有できるウェブサイトを構築。調査研究手法の全国的な普及にも努めた。

3 オオタカ等猛禽類保護を通じての環境保護活動

日本ワシタカ研究センター（愛知県）

野生ワシタカ類の保護・繁殖に取り組む同センターが、国内外の専門家を招いた国際猛禽類保護シンポジウムを名古屋市内で開催。オオタカの営巣が影響した博覧会の開催地問題を踏まえ、環境保護を一過性に終わらせないためのネットワークづくりなどを議論した。

4 『MERRYこどもの森づくり』プロモーション事業

EXPO Café発展協議会（愛知県）

博覧会の成果を地元で継承発展させることを目的に設立された同協議会が、就学前の子どもたちを対象に自然体験活動と環境学習の場を提供。記録ノートやエコバッグの入った「森づくりキット」を全国に3000セット配布し、森づくりへの参加を促した。

5 地球環境のための水のいのちのフォーラム

水のいのちものづくりの国際シンポジウム実行委員会（愛知県）

博覧会を成功に導いた中部の経済団体や自治体が協力し、「水」をテーマにした国際シンポジウムを開催。海面上昇による被害を訴えるミクロネシア連邦大統領をはじめ、国内外の要人や専門家を名古屋に招き、水問題の現状やその解決に向けた連携を確認した。

6 エコプロダクツ2007エコキャラプロジェクト

社団法人産業環境管理協会（東京都）

公害や環境問題に関する調査研究、技術指導を行う同法人が、日本最大級の環境展示会として東京ビッグサイトで開かれた「エコプロダクツ2007」で、各自治体が開発した「エコキャラクター」を一堂に集めて環境問題に対する啓発に努めた。

7 ASEAN諸国自然との共生を目指した交流促進事業

社団法人日本環境教育フォーラム（東京都）

国や企業、NPOとネットワークをつくり、自然体験型環境教育の普及に取り組む同法人がインドネシアで自然と共生する地域住民のドキュメンタリー映像作品を制作。関連のセミナーなども開いてASEAN各国との地球環境保全に向けた国際交流を図った。

8 子どもたちの絵画国際交流事業

特定非営利活動法人ドリーム・コンプレックス（愛知県）

アートの力を通じて豊かで文化的なまちづくりや循環型社会づくりに取り組む同法人が、サラゴサ万博や上海万博での絵画展示を通じた国際交流の実現を目指し、愛知や東京での巡回展やフォーラムの開催、絵画の募集などを呼び掛けた。

9 上海万博ボランティアリーダー交流会

特定非営利活動法人VOICE OF JAPAN（愛知県）

国際交流、特に日中友好支援活動に取り組むため設立された同法人が、愛・地球博での市民ボランティアの経験を生かし、上海万博でのボランティアリーダーの育成などを進める交流活動を行った。

10 IAVEアジア太平洋地域ボランティア会議の開催

特定非営利活動法人愛・地球博ボランティアセンター（愛知県）

博覧会の運営を支えたボランティアらが設立した同法人が「ボランティア活動推進国際協議会（IAVE）」と連携し、アジア太平洋地域ボランティア会議を名古屋市内で開催。各分野のボランティア活動に取り組むアジア太平洋地域の人材との交流を図った。

11 途上国の自然素材開発を通じた国際交流促進事業

特定非営利活動法人ソムニード（岐阜県）

発展途上国の貧困層の自立を支援する同法人が、インドの農村女性と連携し、日本国内の手工芸専門家の協力を得て、母国の自然素材を使った芸術作品づくりに取り組んだ。作品は日本で公開し、資源を有効活用した商品開発のヒントを与え、生活の自立を促した。

12 マイクロ水力発電によるエネルギー自給モデル構築事業

特定非営利活動法人ぎふNPOセンター（岐阜県）

岐阜県内のNPO活動を支援する同法人が、同県郡上市白鳥町の過疎集落で、マイクロ水力発電の実証実験を行い、自然資源の水力を生かした小地域での持続可能なエネルギー自給モデルの構築を探った。

2008年度助成事業

1 青少年を対象とした自然環境－キャリア教育事業

特定非営利活動法人「育て上げ」ネット（東京都）

若者の就労支援などに取り組む同法人が、若い世代に環境問題を意識しながら今後のキャリア（進路、進学、生き方）を考えてもらうための教材を開発。全国の若者サポートステーションで環境の視点をつかむ職業教育プログラム「GREEN CONNECTION」を展開した。

2 日本とアジア地域における猛禽類保護活動の展開

日本ワシタカ研究センター（愛知県）

2007年度の助成事業による国際シンポジウムなどの成果を踏まえ、中央アジアや中国のなど海外の専門家とのネットワークを構築。名古屋での猛禽類保護セミナーに中国の専門家らを招いて意見交換を進めた。

3 自立支援におけるリサイクル・サークル事業

特定非営利活動法人リスタート（岡山県）

ニートや引きこもりの若者に対する社会復帰のための自立支援活動に取り組む同法人が、岡山県内で不法投棄されたごみの回収作業を展開。全国9カ所で事業報告会も開き、若者の社会参加意欲や就労意欲の向上などを促した。

4 第4回東アジア環境市民会議の開催

東アジア環境情報発信所（東京都）

日中韓を含む東アジアの環境問題に関する情報提供やネットワークの構築などに取り組む同団体が、3日間にわたる国際会議を開催。新漏水俣病の関係者と中韓の環境専門家らを招き、日本の悲劇を繰り返さないための人材育成や交流のあり方を議論した。

5 小学生を対象とした環境教育事業

特定非営利活動法人沖縄親交国際協議会（沖縄県）

沖縄をはじめ世界の環境保全を考慮した人材育成や国際協力を進める同法人が、日米の小学生らを対象に「沖縄エコ体験教室」の開催や小学生向け環境教育プログラムの研究開発を通して、子どもたちの環境問題への理解を深めた。

6 気候変動国際シンポジウムの開催

日米民間対話日本委員会等（東京都）

地球温暖化問題の解決に向けた日米の協調を進めるため、産業界が中心となって発足した同委員会が「気候変動国際シンポジウム」を東京で開催。両国の政府関係者や研究者が一同に会し、低炭素社会の実現などをテーマに話し合った。

7 防災・災害復興支援に係るボランティアの国際ネットワークの構築

特定非営利活動法人愛・地球博ボランティアセンター（愛知県）

2007年度の助成事業による「第11回IAVEアジア太平洋地域ボランティア会議」で構築されたネットワークをさらに発展させ、防災・災害復興によるボランティアの国際的なネットワークづくりを有識者会議や啓発イベントの開催を通じて図った。

8 『サラゴサ国際博』子どもたちの絵画・国際交流事業

特定非営利活動法人ドリーム・コンプレックス（愛知県）

サラゴサ博に合わせて「水のある風景」をテーマにした子どもたちの絵画を募集し、万博期間中にサラゴサ市内のギャラリーで展示。視察ツアーやアートフォーラム、東京・愛知での巡回展を通じて、アートを基盤にした国際交流を深めた。

9 次世代水ユースを育てる世界ユース水サミット

特定非営利活動法人日本水フォーラム（東京都）

2003年の第3回世界水フォーラムをきっかけに国内外の水問題の解決に取り組む同法人が、立命館アジア太平洋大学において世界22カ国の若者が自国の水問題について発表し、解決に向けてのアクションプランを提案するワークショップを開催した。その成果物はサラゴサ万博、中国の水博覧会などで広く配布された。

10 上海万博ボランティアリーダー交流会

特定非営利活動法人日中友好支援センター（愛知県）

VOICE OF JAPANから名称変更した同法人が、2007年度の助成事業に引き続き、上海万博でのボランティアリーダー育成のための交流活動を展開。上海側の関係者を日本に招き、愛・地球博跡地や堀川などの視察を企画した。

2009年度助成事業

1 リサイクル・サークル発展事業

特定非営利活動法人リスタート (岡山県)

岡山県を拠点にする同法人が2008年度の助成事業で展開したりサイクル・サークル活動を継続・発展させ、中国地方でのリサイクル活動の推進や、九州・四国を重点として全国10地域での普及活動を行った。

2 青少年のための『環境の視点をつかむ』職業教育事業

特定非営利活動法人「育て上げ」ネット (東京都)

2008年度の助成事業で環境教育プログラムの開発などを行った同法人が、全国からの協力要請に応え、10モデル地区で環境教育の人材養成研修事業と、その修了者による環境・職業(キャリア)教育講座を主催した。

3 あなたと共に紡ぎのコミュニケーション2009

特定非営利活動法人さをりひろば (大阪府)

リサイクル糸を使った個性豊かな新しい手織りづくりを通じて障害者や高齢者の福祉を向上させようとする同法人が博覧会での経験やネットワークを生かし、全都道府県をめぐって手織りを制作し、横浜開港150周年博会場などで展示、国際シンポジウムを開催した。

4 日中の障害者による文化創造と社会参加

財団法人たんぽぽの家 (奈良県)

障害児らの教育や療育、アートセンターの設立などを通じて地域社会の福祉向上を目指す同法人が、上海万博のプレ企画として上海市障害者連合会と協働してアートフォーラムやワークショップ、研修などを日中で行った。

5 森を守ろう! ~間伐材を用いた箸作りを通して~

社団法人長野青年会議所 (長野県)

長野市での第59回国際青年会議所アジア太平洋会議長野大会に合わせて、実行委員会の同法人が北信越の小学校で環境授業を開き、間伐材を用いた箸を制作して大会参加者に「マイ箸」として提供するなどの各種環境活動を展開した。

6 Make a CHANGE Dayの開催

特定非営利活動法人愛・地球博ボランティアセンター (愛知県)

欧米でボランティア活動の重要イベントとして定着している「Make a Difference Day」を参考に、「Make a CHANGE Day」を定めて環境分野でのボランティア・市民活動を呼び掛け、優秀活動の表彰や活動内容のデータベース化を進めた。

7 にほんの里支援交流プログラム2009

財団法人森林文化協会 (東京都)

森林に関する総合的な研究や普及事業などに取り組む同法人が、朝日新聞と共同で選定した「日本の里百選」を基準に、全国のNPOと連携して「里のいとなみ」シンポジウムの開催や「フットパス(里道)」運動展開、「里の知恵蔵」データベース構築などを行った。

8 『地球に優しい建築』展、アジア巡回展

特定非営利活動法人N・C・S (東京都)

住宅、建築分野で技術開発のネットワーク構築などを行う同法人が、2008年のエチオピア・ゴンダール市での日本館開館記念イベント「地球に優しい建築」展の成果を中国、韓国で巡回展示した。

9 『環境劇をつくろう』プロジェクト

特定非営利活動法人フリンジシアタープロジェクト (京都府)

関西地方を中心にフリンジシアター (300席以下の劇場での舞台芸術) 活動に取り組む同法人が、2005年以來行っている「環境劇をつくろう」プロジェクトを、中部以北で地域の特色を織り込んで行った。

10 『演劇』が喚起する地球環境への感性と国際交流

社団法人国際演劇協会 (東京都)

演劇を通じた世界各国との交流活動を行っている同協会が、上海万博開催期間中の上海で上海戯劇院と共同事業を行うことを視野に入れて、国内で早稲田大学と連携してドラマ・リーディングの開催、演劇的エコの可能性の提言、国際シンポジウムなどを開き、環境と演劇の関係性を考えた。

11 ESDの10年・地球市民会議2009

「ESDの10年・世界の祭典」推進フォーラム (東京都)

国連のESD (Education for Sustainable Development) プログラムを推進する同団体が、「ESDの10年」キャンペーンをリードするキーパーソンの講演、ESDの先進活動状況レポート、各種展示などを盛り込んだ市民会議を開催した。

12 『上海万博』子どもたちの絵画・国際交流事業

特定非営利活動法人ドリーム・コンプレックス (愛知県)

助成事業による過去2年の活動を踏まえ、上海万博会場内で「まち」をテーマにした国内外の子どもたちの絵画展示を計画。そのための日中共同での絵画募集、審査、展示物制作などを行った。

13 小さな地球計画2009 -アジア5カ国交流事業-

特定非営利活動法人地球市民の会 (佐賀県)

長年アジアとの国際交流を通じた地域おこしに取り組んでいる同法人が、教育支援しているスリランカやタイの高校生、さらに韓国の高校生の参加を得て、日本の小学生から大学生までの子どもたちとの合同による「森と農」をテーマとした環境教育プログラムを日本国内で繰り広げた。

2010年度助成事業

1 第2回 Make a CHANGE Day の開催

特定非営利活動法人愛・地球博ボランティアセンター（愛知県）

環境との共生、環境問題の改善・解決等の活動を全国に展開する事業として、昨年度に続き、2回目の「Make a CHANGE Day」を定めて、全国での自然・環境等の分野におけるボランティア・社会市民活動の呼びかけ、優秀な活動の表彰や活動内容のデータ化を進めた。

2 上海万博への日本人ボランティア派遣事業

一般社団法人上海万博ボランティア協力実行委員会（愛知県）

上海万博への日本からのボランティア参加を通じ、ボランティアの意義や楽しさを啓発することによる新たな市民社会づくりに寄与することを目的とした同法人が、上海万博で日本人来場者向けのボランティア活動を行い、その活動結果をシンポジウム等の場で発表した。

3 里の暮らし支援交流プログラム2010

財団法人森林文化協会（東京都）

10月の生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）の名古屋開催を踏まえ、その生物多様性の重要性を訴求した世界規模での植樹イベント（グリーンウェイブ支援イベント）の実施や地域の持続的な発展と活性化を願った物産展、里道探索等の「日本の里100選」事業を実施した。

4 アジア太平洋障害者アートフェスティバル

財団法人たんぼぼの家（奈良県）

上海万博を通じ、昨年度に実施した障害者の日中芸術文化交流の理念と成果を、台湾、タイ、豪州等のアジア太平洋地域へと交流を広げて、上海において、6月に「アジア太平洋障害者アートフェスティバル」を、8月に「アジア太平洋Art for All会議」を開催した。

5 水の手紙・上海共同事業

社団法人国際演劇協会（東京都）

日中の演劇交流を通して環境問題への感性を高めることを目的に、上海戯劇学院との協働により、6月に上海、杭州、東京において、水をめぐる環境問題を考える井上ひさし氏の戯曲「水の手紙」等のドラマ・リーディングや国際シンポジウムを実施した。

6 日中韓視覚障害者交流音楽祭

社会福祉法人視覚障害者文化振興協会（大阪府）

上海万博を契機に、日中韓の協力により、9月に上海で視覚障害者による交流コンサート等の各種イベントを実施した。

7 ESDの10年・地球市民会議2010

「ESDの10年・世界の祭典」推進フォーラム（東京都）

国連のESD（持続可能な開発のための教育）プログラムを推進する当団体が、昨年度に引き続き、「ESDの10年」の総括年となる2014年に向けて、9月に「ESDの10年・地球市民会議2010」による国際シンポジウム等を実施した。

8 あなたと共に紡ぎのコミュニケーション2010上海

特定非営利活動法人さをりひろば(大阪府)

愛・地球博で行ったリサイクル糸を使用した手織り「さをり織り」を通して高齢者や障害者の福祉を向上させる市民プロジェクトを海外に伝えるため、上海万博を契機に、7月に上海で、9月に香港で国際交流シンポジウム、ワークショップ等を実施した。

9 都市の生物多様性とデザインURBIO2010

URBIO2010実行委員会(愛知県)

10月のCOP10の名古屋開催を踏まえ、5月に名古屋で都市における生物多様性の向上・維持を図っていくための研究成果・情報交換の場である「都市における生物多様性とデザインURBIO2010」国際会議を開催した。

10 アジア青少年環境リーダーネットワーク事業

公益社団法人日本環境教育フォーラム(JEEF)(東京都)

自然体験型環境教育を基本に、国・企業・NPOとネットワークを形成し、持続可能な社会づくりに貢献することを目的に設立された同法人が、多様な文化と価値観が存在するアジア(我が国を含む)の次世代環境リーダーに地球的課題の解決に向けた共通認識と連帯感を醸成するため、協働研修等によって育成、交流するためのネットワーク構築事業を実施した。

11 グリーンマップ作成&普及に係るプロジェクト

特定非営利活動法人地域の未来・志援センター(愛知県)

持続可能な社会に向けた地域づくりを行うNPO、企業、行政に対して戦略的、総合的な地域デザインの各種サポートを行うことを目的として設立された同法人は、COP10の名古屋開催を踏まえ、街の環境を調査して作成した環境マップ「暮らしの中の生物多様性グリーンマップ」の展示・配布、報告会等を実施した。

12 自給自足、地球環境の保全を推進する屋上農園事業

特定非営利活動法人TABLE FOR TWO International(東京都)

我が国での食生活の改善と開発途上国への学校給食支援を一体的に行う活動を推進している同法人が、我が国の都市部での農業生産の新たな取り組みとして、ビルの屋上を活用する「屋上農園実験事業」(三軒茶屋コミュニティ菜園、10° CAFÉ FARM)や南アフリカの小学校での学校菜園の設置・運営等を実施した。

2011年度助成事業

1 「愛・地球博から麗水EXPOへ」日中韓児童による環境教育事業

特定非営利活動法人ドリームコンプレックス (愛知県)

麗水万博を支援・協力する目的で、同万博のテーマである「生きている海、息づく沿岸」に因み、「海」をテーマに日中韓の子供達の絵画を募集し、2012年3月に名古屋で「韓国・麗水EXPO展」等を開催した。

2 こども環境ミュージアム「Kibouに向かって!」

特定非営利活動法人チルドレンズ・ミュージアム (長野県)

地方都市 (長野県及び新潟県) の子供達に環境や自然科学プログラムを体験学習してもらうために、体育館等を活用した移動式のミュージアムを実施した。

3 第3回 Make a CHANGE Day の開催

特定非営利活動法人愛・地球博ボランティアセンター (愛知県)

2009年から3回目の「Make a CHANGE Day」は、自然・環境等の分野におけるボランティア・社会市民活動に加え、「東日本大震災」からの復興を目差した「絆」をテーマに、被災地の人々から全国の人々につながる「共助」・「共生」の呼びかけを実施した。またこれ等の優秀な活動の表彰や日米韓による国際シンポジウム等を開催した。

4 「森にふれ 森と生きる」くらし実践プログラム

公益財団法人森林文化協会 (東京都)

5月に、国際森林年を記念し、防災や国土復興を含めた森林が果たす役割について考えるイベント「国際森林年記念グリーンウェイブ2011～みどりの力～」の開催や、奈良県奥明日香、岐阜県山之村、青森県蕨温泉、京都府伊根・上世屋等にほんの里100選地域への「フットパス」を実施し、当協会のHP等で情報発信した。

5 世界をつなぐいきものの道・風の道プロジェクト

特定非営利活動法人アサザ基金 (茨城県)

自然のつながり (いきものの道、風の道) を通じて、都市 (原宿表参道) と過疎地・離島 (多良間島・宮古島) という異なる地域と環境保全の交流・協働のために、地元の調査やイベントを実施した。

6 生物文化多様性・国際交流プロジェクト: 森と草原

愛知県公立大学法人 (愛知県)

世界の諸民族が伝えてきた「森と草原の達人から生き方を学ぶ」をコンセプトに、「森と草原の本物の家を作る」体験型ワークショップ、学術フォーラムや音楽祭等を実施した。

7 『地球環境』日本インドこどもの絵を通じた国際理解促進事業

特定非営利活動法人国際教育情報交流協会 (東京都)

COP11の開催国であるインドと日本の教育関係者が連携し、両国の子供達による地球環境をテーマとした絵画展、「環境・造形教育と国際協力」国際フォーラム等を両国 (ニューデリー、名古屋) で開催した。

8 アジア青少年環境リーダーネットワーク事業

公益社団法人日本環境教育フォーラム（東京都）

昨年度に引き続き、多様な文化と価値観が存在するアジア（我が国を含む）の次世代環境リーダーに地球的課題の解決に向けた共通認識と連帯感を醸成するため、協働研修等による育成、交流するネットワーク構築事業を実施した。

9 生物多様性保全及び復興活動推進のための国際会議

公益財団法人オイスカ（東京都）

開発途上国に対する産業開発協力事業の推進及びこれ等諸国との友好親善に寄与することを目的として設立された当法人が、生物多様性の保全を第一とした持続可能な地域開発（ふるさとづくり）を行っていくためにはどのような手法が必要かとの視点から、10月に東京で「持続可能な地域社会づくりをめざした国際協力ー生物多様性の保全及び回復活動推進のための国際会議」を開催した。

10 ESDの10年・地球市民会議2011

「ESDの10年・世界の祭典」推進フォーラム（東京都）

愛・地球博においても実践されたESD（持続可能な開発のための教育）運動、その発展を目指す「ESDの10年」の総括年となる2014年に向けて、9月に愛知県で国連大学等の協力による推進フォーラム「ESDの10年・地球市民会議2011」を開催した。

11 アジア・ユースサミット・プログラム

社団法人アジア協会アジア友の会（大阪府）

「地球の未来に向かって～持続可能な地域を目差して」を目的とする国際的な青少年育成プログラムにおいて、8月に大阪で、アジア13カ国の高校生が一同に会した合宿形式の国際会議「第2回アジア・ユースサミット」を「地域の中で子供達の幸せを実現するために」のテーマで開催し、自分達が出来ることから行動することを約束した「アクション・プラン」を採択した。

12 能登半島・輪島から発信する環境保全活動

輪島商工会議所（石川県）

輪島市での環境対策及び高齢者対策としてのエコカート、ペロタクシーのような次世代交通システムの実証実験、輪島塗体験、里山体験等の「都市と田舎の交流事業」、能登里山里海マップ作成、ウォーキング大会等の「環境・観光ウォーキング事業」等を実施した。

2012年度助成事業

1 子どもたちのどんぐり育成・緑再生協カプロジェクト

公益財団法人日本環境協会（東京都）

環境保全に関する調査研究、環境教育活動、エコマーク事業等に取り組んでいる同法人が、東日本大震災により被害を受けた岩手、宮城、福島各県の緑地再生に向け、関係する自治体・団体等と連携して、子供達によるどんぐりの苗木作り等を実施した。

2 伝統産業・海女の歴史文化 伝承、保全事業

鳥羽商工会議所（三重県）

麗水万博での海女文化フォーラムを契機として、日韓両国の関係者が協力し、海の環境保全と海女文化の普及啓発、両国の海女文化交流等をテーマとするセミナー、イベント、展示会等を両国で実施した。

3 「麗水EXPO」日中韓・児童絵画による環境教育事業

特定非営利活動法人ドリーム・コンプレックス（愛知県）

麗水万博に向けて募集された日中韓の子供達の絵画について、同万博会場内での入賞作品の展示（日中韓合同「世界児童絵画展」）や当該作品をコンテンツ映像にして「エキスポ・デジタルギャラリー」で放映した。

4 ひとつづくり・ものづくり「知恵と技 こども競技大会」

ひとつづくり・ものづくり「知恵と技 こども競技大会」実行委員会（愛知県）

愛・地球博のテーマである自然の叡智及び生物多様性・環境保全をテーマとし、中部地方を中心に全国ベースでの子供達によるものづくり競技大会（ひとつづくり・ものづくり「知恵と技 こども競技大会」）を2013年2月に実施した。

5 持続可能な環境配慮型社会づくりに貢献する人材育成事業

特定非営利活動法人関西国際交流団体協議会（大阪府）

ESDなどの取り組みを含め、国際的な視点に立った「持続可能な社会に私達ができること」をテーマに、若者達の環境への意識啓発と参加を促進させることを目的に、NGO/NPOや教育機関、企業、市民と連携・協力して、セミナー、フォーラム等を実施した。

6 あなたと共に紡ぎのコミュニケーション2012

特定非営利活動法人さをりひろば（大阪府）

東日本大震災の被災者支援活動として、被災した福島、宮城、岩手の各県において、リサイクル糸を使用した「さをり織り」を行う工房の立ち上げ、生産・販売等を実施した。

7 『環境と平和』日越こどもの絵 国際理解促進事業

特定非営利活動法人国際教育情報交流協会（東京都）

日本とベトナムの教育関係者の連携により、両国の子供達による「地球環境」をテーマとした絵画の募集・選定・展示及び国際シンポジウム「日本とベトナムの環境と造形教育」等を両国で実施した。

8 「森と共に生きる暮らし方」探訪キャラバン

特定非営利活動法人グリーンバレー（徳島県）

芸術・環境保全・国際交流を通じたまちづくり事業等を行っている当法人が、国内外の映像作家等による全国各地（徳島県、長野県、山形県、島根県、沖縄県）での映像制作及び成果物の上映会、シンポジウム等を実施した。

9 「海民ネットワーク形成」古代からのつながりを求めて

特定非営利活動法人表浜ネットワーク

遠州灘沿岸地域における環境保全活動、同保全団体間の情報交流等に取り組む当法人が、麗水万博を契機として、海洋と人間との共生について、古代から現在に至る海洋民族の足跡をたどりつつ、海洋文化資料の収集・データベース化、展示資料の作成等を行い、麗水万博会場でのシンポジウムをはじめ日韓両国でワークショップ等を実施した。

10 「海といのち、水といのち」

～地球環境を考える為の日韓演劇交流ドラマ・リーディングと国際シンポジウム

社団法人国際演劇協会（ITI/UNESCO JAPAN CENTRE）（東京都）

麗水万博を契機として、韓国において、演劇と環境の関わりをテーマとし、日韓の演劇交流として、日本の劇作家井上ひさしの「水の手紙」及び韓国の劇作家コ・ヨノクの「私の名は河」の朗読劇等を実施した。

11 GHGT-11シンポジウム事業

公益財団法人地球環境産業技術研究機構（京都府）

2012年11月に我が国でCCS（CO₂の回収・貯蔵）分野における政府、企業、研究者等が集う世界最大級の国際会議である第11回温室効果ガス制御技術国際会議（GHGT-11）が開催されたのに合わせ、地球温暖化対策のための様々な視点での講演・議論を、広く国内関係者に情報発信すべく国際シンポジウムを開催した。

12 能登と東北から発信する「共生」と「ともいき」事業

輪島商工会議所（石川県）

世界農業遺産に認定された輪島・千枚田において、自然や環境等に配慮したエコカートによる次世代交通システムの実証実験、及び都市と地元の子供達の交流や自然環境を体験する「里山学習&里山体験」、能登里山里海ウォーキングコース・ガイドブックの作成等の「環境・観光ウォーキング事業」等を実施した。

2013年度助成事業

1 3.11後の郊外社会を創造する半農半芸プロジェクト

特定非営利活動法人取手アートプロジェクトオフィス (茨城県)

3.11後の新たな郊外社会づくりを目指して、その土地の風土・文化を踏まえた「植物から絵具をつくる」造形ワークショップ、「ニホンミツバチの養蜂から考える環境づくり」フィールドワーク、「里山の保全活動」ブナ林の環境整備、土蔵や藁葺古民家再生、耕作放棄地の利活用等を実施した。

2 宮城県石巻市における海と山が繋がる新しい自然体験プログラムの開発事業 おがつ自然学校 おがつアカデミー

公益社団法人sweet treat 311 (宮城県)

東日本大震災の被災地域において、震災後の持続可能な地域コミュニティづくりのために、地元の人々と資源を活用した子供達の遊びの場、新しいまちづくりに取り組む当法人が、「おがつアカデミー」、「おがつ自然学校」での地元と首都圏の子供達に自然や農業・漁業・林業を体験させるプログラムを実施した。また、その体験を振り返るITプログラムを開発した。

3 ESDグッドプラクティスの収集・評価・顕彰事業

特定非営利活動法人関西国際交流団体協議会 (大阪府)

「ESDの10年」の取り組みを総括すべく、これまで実施されたESD取組み事例の収集・評価し、事例集として冊子及びデジタルアーカイブの作成して情報共有を行った。また、ESD実施団体と共にセミナー・ワークショップ等を実施し、実施団体同士の学びあいの場を提供すると同時に、市民への啓発を行った。

4 児童絵画による環境教育事業 — 愛・地球博から麗水万博 — 「Kids Art Festa 2013」と「万博シンポジウム」

特定非営利活動法人ドリームコンプレックス (愛知県)

愛・地球博以降の万博で募集・実施してきた子供絵画展の集大成となる「Kids Art Festa 2013 児童絵画展」及び「EXPOシンポジウム・表彰式・祝祭ステージ」を実施した。

5 持続可能な衛生技術・システムの普及に向けた事業 — 世界を変えるトイレプロジェクト —

特定非営利活動法人日本水フォーラム (東京都)

2003年第3回世界水フォーラムで培われた人的財産、情報等を維持発展させ、国内外の水問題解決に寄与することを目的とした当団体は、持続可能な社会を地球規模で実現していくために、途上国における野外排泄の根絶と社会インフラの整備の促進、先進国においては防災意識の啓発・醸成等を図るべく、啓発イベント、セミナー、国際シンポジウム、トイレの普及・拡大に資するビジネスモデル調査等を実施した。

6 ESD地球市民村「ESDラーニング・プログラム」

「ESDの10年・世界の祭典」推進フォーラム (東京都)

2014年に日本での開催が決まった「ESDの10年・世界の祭典」事業に向けて、一般の方々に身近にESDに参加・体験してもらう「あいち・なごやESDフェスタ2013 in 三河」(2013年11月)、「ESDイヤーキックオフイベント」(2014年1月)等を実施した。

7 『環境と自然』日本ネパール子どもの絵 国際理解推進事業

特定非営利活動法人国際教育情報交流協会（東京都）

日本・ネパールの教育関係者の連携により、両国の子供達による「地球環境と自然」をテーマとした絵画の募集、選定、展示会、子供向けワークショップ、国際シンポジウムの開催等を両国（カトマンズ市と上田市）で実施した。

8 第3回アジア・ユースサミット

公益社団法人アジア協会アジア友の会（大阪府）

2013年8月に第3回アジア・ユースサミットを大阪・奈良で開催。我が国を含むアジア13カ国の高校生が一同に会し、「環境とモラル～いのちを守る食の行方、現在から未来へ～」をテーマに、自らが居住する地域の食に関する課題を調査し、そこから解決方法を見出し、最終的には課題解決のための行動指針を発信した。

9 「森と共に生きる暮らし方」探訪キャラバン2013

特定非営利活動法人グリーンバレー（徳島県）

前年度に引き続き、国内外の映像作家等による全国各地（徳島県、愛媛県、静岡県、鹿児島県、福島県、福井県、東京都、千葉県）での映像制作、上映会及びシンポジウム等を実施した。

10 自然環境都市輪島からの魅力と絆発信事業

輪島商工会議所（石川県）

昨年度に引き続き、「自然環境都市輪島」に相応しい、環境等に配慮したエコカートの「車道」試験走行による次世代交通システムの実証実験、都市と地元の子供達の交流や自然環境を体験する「輪島・里山里海体験プログラム」、「里山里海ウォーキング促進事業」等を実施した。

2014年度助成事業

1 宮城県石巻市における海と山に繋がる新しい自然体験プログラムの開発事業 おがつ自然学校 おがつアカデミー

公益社団法人sweet treat 311 (宮城県)

昨年度に引き続き、東日本大震災被災地の石巻市雄勝町において、2013年度に開講した「おがつアカデミー」において、532名の子供達に地元の農家や漁師による農林漁業の体験、及び自然体験やITによる映像発信ワークショップを実施した。また日本や上海のアメリカンスクール生との国際交流プログラムも実施した。

2 未来へ！ 幼児童向け感性を育むプログラム開発事業

一般財団法人鹿児島県環境技術協会 (鹿児島県)

乳幼児の自然体験を通じた環境教育のためのプログラム開発やマニュアル作り、キット制作、人材育成の研修活動等を実施した。

3 3つの輪プロジェクト ～農と自然と人との輪を繋ぐ～

一般財団法人C. W. ニコル・アフアの森財団 (長野県)

東京都、長野県、宮城県各地域の小学生達に、学校、農業団体と連携して、昔から営まれてきた農業と自然の関係性、農地の大切さ、「人間の営み」「生きものの営み」双方向の繋がりを深め、理解してもらうための環境教育活動等を実施した。

4 東北・都市・地域の子どもたちが共に取り組む棚田保全活動

特定非営利活動法人越後妻有里山協働機構 (新潟県)

越後妻有(つまり)地域の棚田保全活動の一環として、東北被災地・都市・地元の子どもたちが棚田で、田植え・草刈りから稲刈りまでの一連の農業体験、及び関連のワークショップ、イベント等の環境教育活動を実施した。

5 こどもエコクラブ&ESDフォーラム

公益財団法人日本環境協会 (東京都)

2014年8月、ESD(持続可能な開発のための教育)をテーマに、国内外で環境活動に取り組む子供たちの日頃の取り組みや課題、展望を発表し合い、友好を深める「こどもエコクラブ&ESDフォーラム」を名古屋市、岡山市及び東京都で開催した。また11月に名古屋で開催された「ESDユネスコ世界会議」のサイドイベント、12月に東京で開催された「エコプロダクツ2014」において同フォーラムの成果を発信した。

6 森の恵みと暮らし方 ーブナ帯・食ごよみー

公益財団法人せたがや文化財団 (東京都)

東日本のブナの森を通して、日本の基層文化から現代に生きるブナ帯文化を探る展示、シンポジウム及びワークショップ等を東京(世田谷区)、宮城(気仙沼市)及び山形(鶴岡市)で実施した。

7 NPOによるESD実践と若者人材育成イニシアティブ

特定非営利活動法人関西国際交流団体協議会 (大阪府)

これまでの実績とネットワークを発展させ、ESDユネスコ世界会議の開催に合わせてユネスコスクール、NPO等地域コミュニティとの連携システムの構築、NPOによるESD実践事例を若者へ普及させるため、啓発資料の作成、セミナー・シンポジウムを大学やコミュニティーセンター等で開催した。

8 持続可能な衛生技術・システムの普及に向けた事業II ー世界を変えるトイレプロジェクトー

特定非営利活動法人日本水フォーラム（東京都）

持続可能な衛生技術・システムの普及に向け、昨年度の成果を踏まえ、東京において、2014年8月に親子向けワークショップ「水の展示会2014」、11月に企業向けセミナー&パネル展示を開催した。2015年4月には韓国で「第7回世界水フォーラム」のサイドイベントとして国際シンポジウムを開催した。またバングラデシュにおいて持続可能なトイレビジネスモデルの構築及び実証を行った。

9 2015年ミラノ国際博覧会への出展等の協力と準備事業 輪島商工会議所（石川県）

ミラノ博日本館での日本食レストランで使用される食器の作成・提供及び食材提案、日本文化及び世界農業遺産「能登」の紹介パンフレット作成といったミラノ博出展協力のための準備活動を実施した。

10 グリーンアジア実現に向けた日中韓国際環境会議 特定非営利活動法人日中産学官交流機構（東京都）

2014年11月、日中韓の民間研究機関の協力による環境問題（大気、水、固形廃棄物）への取組等を促進する日中韓の「第2回東アジア環境管理及び産業協力フォーラム」を中国（北京）で開催し、グリーンアジア実現に向けた日中韓国際環境会議を実施した。

11 「ミラノ万博」国際交流子ども料理教室による環境教育 小浜商工会議所（福井県）

ミラノ博日本館で行う幼児向け料理プログラム「キッズ・キッチン」のための準備活動として、ミラノ博出展期間に使用するDVD・パンフ・団扇等の作成、ミラノ博日本館・ミラノ市内視察、小浜市でのミラノ博イベントの開催を実施した。

12 「自然の叡智」集結・共有のための国際環境教育モデル事業 公益財団法人オイスカ（東京都）

ESDユネスコ世界会議の我が国での開催を契機に、日本とアジア地域（フィリピン、インド、タイ、インドネシア、スリランカ、ミャンマーの6ヶ国）の子どもたちが共に参加し学び合うことのできる「自然の叡智」集結のための国際的環境教育モデル活動（セミナー、ワークショップ）を日本国内や海外（フィリピン、インドネシア、スリランカ）で実施した。

13 「森と共に生きる暮らし方」探訪キャラバン2014 特定非営利活動法人グリーンバレー（徳島県）

昨年度に引き続き、国内外の映像作家等の協力による愛媛県、愛知県での「森と共に生きる暮らし方」探訪キャラバンについての取材映像の制作・上映、及びウェブサイトの制作等を実施した。

14 自然との共生を体現するスローフードの調査・発表事業 特定非営利活動法人TABLE FOR TWO International（東京都）

自然との共生を軸にしたイタリア・スローフード先進事例の調査、我が国で先進事例を応用したガイドライン、新メニューの作成及びPR・情報発信等を実施した。

2015年度助成事業

1 3つの輪プロジェクト ～農と自然と人との輪を繋ぐ～

一般財団法人C. W. ニコル・アフアンの森財団（長野県）

昨年度に引き続き、東京、埼玉、長野、宮城の様々な地域で学校、農業団体等と連携して実施している環境教育活動「農と自然と人との和を繋ぐ3つの輪プロジェクト」のより充実した事業活動等を実施した。

2 東北と世界を結ぶ祭博2015

一般社団法人三陸国際交流協会（岩手県）

2015年10月に岩手県大船渡市において、過去4年間に開催されている大船渡・東北3大祭りを通して、大船渡地域の震災復興やふるさと回帰、持続可能な地域づくりを目差すと共に、韓国の伝統芸能団体「トブロン農楽団」を招へいし、国際的な祭博への発展を目指す活動を実施した。

3 2015年ミラノ国際博覧会への出展等協力事業

輪島商工会議所（石川県）

昨年度に引き続き、能登の里山・里海の紹介・PR事業として、ミラノ博日本館の日本食レストランで輪島塗の漆器の使用、同館イベント広場での能登の伝統芸能である御陣乗太鼓の実演、同博連携展示会ミラノ・ホームでの輪島塗のPR等を実施した。

4 第4回アジア・ユースサミット

アジア協会アジア友の会（大阪府）

2015年8月に第4回アジア・ユースサミットを大阪・奈良で開催。日本を含むアジア14ヶ国84名の青少年が、「地域を良くするプロジェクトを創ろう！経済、文化、環境が活きるまちづくりを目差して」をテーマに、自らが居住する地域の持続可能な地域づくりを目差して、様々な社会的課題に気づき、その解決方法を見出し、実践することを通して、若者を育てるプログラムを実施した。

5 ミラノ万博における“食卓を通じた国際交流”出展事業

日本陶磁器産業振興協会（愛知県）

2015年6月にミラノ博日本館イベント広場において、日本の器文化の魅力をPRするため、「日本の器 日本の食卓」をテーマにしたステージパフォーマンス、テーブルコーディネート、参加型イベント等を実施した。

6 自然の叡智の共有及び実践のための国際環境教育事業

公益財団法人オイスカ（東京都）

昨年度に引き続き、我が国とアジア・太平洋地域（インド、マレーシア、ミャンマー、パプアニューギニア、インドネシア、タイの6ヶ国）の子どもたちが環境保全活動をテーマに、学び合う交流活動、ワークショップ、セミナーを日本国内及び海外（インド、インドネシア、ミャンマー）で実施した。

7 「ミラノ万博」国際交流子ども料理教室による環境教育

小浜商工会議所（福井県）

2015年7月にミラノ博日本館イベント広場において、前年度から準備していた、食材を無駄にしない国際交流子供料理教室「キッズ・キッチン」及び若狭塗箸作りの体験型ワークショップを実施した。

8 ミラノ万博における発酵食文化の国際交流モデル事業

公益財団法人中部圏社会経済研究所（愛知県）

国際的な食文化交流を目差して日本食の特徴である「みそ」、「しょうゆ」等の発酵食品をテーマに、2015年8月にミラノ市内でのシンポジウムやワークショップ、同年10月に我が国での関連イベントを実施した。

9 TICADVI関連アフリカ・日本の交流イベント

特定非営利活動法人アフリカ日本協議会（東京都）

2016年8月のアフリカ開発会議（TICADVI）開催に向けて、2015年11月にケニア及びエチオピアでのイベント、2016年3月にジブチでの高級実務者会合におけるサイドイベント等を実施した。

10 屋久島の里の持続可能な利用形態構築事業

公益財団法人屋久島環境文化財団（鹿児島県）

自然と共生しつつ、長年に亘って積み重ねた屋久島の環境文化を発信し、併せて次世代に継承するための調査、人材育成、「屋久島里めぐり」プログラムづくり等の事業を実施した。

2016年度助成事業 (実施中)

1 地域の生活技術を学ぶ棚田保全活動

特定非営利活動法人越後妻有里山協働機構 (新潟県)

越後妻有地域において、廃校再生キャンパスの活用等により、より充実した棚田保全活動を実施する。

2 SDGへ向けたグローバル環境教育モデル事業

公益財団法人オイスカ (東京都)

2016年からスタートする「国連持続可能な開発目標 (SDGs)」に向けたグローバル環境教育モデル事業を実施する。

3 「第10回国際絞り会議 in Mexico」INDIGO EARTH 開催事業

特定非営利活動法人コンソーシアム有松鳴海絞 (愛知県)

2016年11月にメキシコ・オアハカ市で開催される「第10回国際絞り会議 in Mexico」に参画し、環境に配慮した日本の藍染の紹介・体験実習、有松・鳴海絞り職人による実演・ワークショップ等を実施する。

4 水問題についての大陸間教育と大陸間ミュージカル広場

学校法人椋山女学園 (愛知県)

アフリカ・ブルキナファソ及びフランス・ストラスブールの小学校と協力して、地球的な課題である水問題をテーマとしたミュージカルを制作し、2016年9月に名古屋市で開催される「NAGOYA 港まち・アッサンブラージュ」の一環として同公演を実施する。

5 東北と世界を結ぶ祭博2016

一般社団法人三陸国際交流協会 (岩手県)

岩手県大船渡市において、これまでの経験を活かして、大船渡地域の震災復興やふるさと回帰、持続可能な地域づくりに向けた大船渡「祭り博」等を実施する。

6 ボルドーにおける発酵食文化の国際交流モデル事業

東海発酵文化研究会 (愛知県)

発酵食文化の国際交流をミラノ博に引き続き持続発展させるべく、2016年11月にフランス・ボルドー市において、「日本・愛知とボルドーの発酵食文化交流シンポジウム」等を実施する。

7 プレビヒア地域の観光セクター人材開発

特定非営利活動法人アジアの誇りプレアビヒア日本協会 (東京都)

カンボジア・プレアビヒア地域において、歴史的文化遗产保全、地域自立に貢献すべく、スマートフォンの活用によるカンボジア語での「おもてなし観光教材」の開発、普及を実施する。

8 TICAD VI日本・アフリカ交流イベント

特定非営利活動法人アフリカ日本協議会（東京都）

2016年8月にケニア・ナイロビで開催されるアフリカ開発会議（TICAD VI）会合を踏まえて、本会合及び準備会合でのサイドイベント等を実施する。

9 スマート6次産業化農業の新たなモデルづくり

特定非営利活動法人アグリコミュニティ千歳（北海道）

千歳市千歳駒里地区において、地元の教育・研究機関、農業関係者の協力を得て、農業の6次産業化の実験的な事業を実施する。

10 屋久島の里の持続可能な利用形態構築事業

公益財団法人屋久島環境文化財団（鹿児島県）

自然と共生しつつ、長年に亘って積み重ねられた屋久島の環境文化の発信、次世代への継承のための調査、人材育成等の事業を、2015年度に引き続き実施すると共に、新たに奄美大島との環境文化面での連携、交流活動を実施する。

愛・地球博

～理念の継承と展開～

発行日：2016年5月31日

発行：一般財団法人 地球産業文化研究所

〒103-0015

東京都中央区日本橋箱崎町41番12号

KDX箱崎ビル6階

TEL：03-3663-2500

FAX：03-3663-2301

URL：<http://www.gispri.or.jp/>

編集協力：株式会社 中日新聞社

印刷：長苗印刷株式会社

写真提供：中日新聞社、関口威人、愛・地球博ボランティアセンター、
愛知県、上海世博会事務協調局（順不同）

本誌は環境にやさしい森林認証紙を使用しています。

非売品

